杏林大学

杏林大学 2021年度 地域交流活動報告書

発 行 日　2022年9月

編集発行　杏林大学 地域連携センター

〒181-8612 東京都三鷹市下連雀5-4-1
TEL.0422-47-8000(代) FAX.0422-47-8054

http://www.kyorin-u.ac.jp/univ/society/area2/

REEN PRINTING JFP
P-010010

地域交流活動報告書

文部科学省 地(知)の拠点

2021
令和3年度

杏林大学

杏林大学 地域交流活動報告書　目次

■ 杏林大学 地域交流活動報告書　刊行にあたって

杏林大学における
地域交流活動のさらなる発展を目指して
学長　渡邊　卓　2

地域連携と学生教育とが連動した
新たな取り組みへ
地域連携センター長　石井 博之　3

地域を志向した教育活動

① 1年次科目「地域と大学」「社会と大学Ⅲ」開講　4
「地域における大学の役割」を学ぶ

② 2021年度「高齢社会における地域活性化
コーディネーター養成プログラム」開講　7

③ 地域・地方からの学び　8

杏林CCRC指定研究活動

① 健康寿命延伸　10
杏林大学のシーズを地域の街づくりへ展開する
総合的研究

② 少子高齢社会像の構築　11
子育てにおける地域内での「つながり」構築に向けた
実践研究

③ 健康寿命延伸　12
難聴を伴う高齢がん患者への
意思決定支援サポートに関する研究

④ ウェルネスツーリズム　14
「杏林型ウェルネスツーリズム」の構想立案と実施
およびその妥当性検証の研究

⑤ 災害に備えるまちづくり　16
東日本大震災からの教訓と首都直下型地震への備え：
米国ポートランドとの協業

地域における研究活動

日本人に理想的な気管カニューレ開発を
目指した産学連携シーズ創出事業　17
―超高精細CTによる生体内に留置されたカニューレの
可視化と適正の検証―

地域における社会貢献活動

① BLS指導を通した実践的な
災害対応力の向上と共助精神の涵養　19

② 三鷹市における健幸教室および
体力測定会の開催　20

③「生涯スポーツの機会提供」プログラム　22

④ 多胎育児支援活動 ～ツインズマーケット～　23

⑤ 性の多様性に対応したシナリオによる
「いのちのおはなし会」の実践　24

⑥ 鎌倉浄智寺写真供養感謝祭の企画　25

⑦ 子どもの発達や子育ての不安を抱えた
保護者への心理的支援　26
（オンライン子育て相談会の開催）

⑧ コロナ禍における介護予防事業の展開　28

⑨ Mindful Community Project　29

⑩「多摩地域マイクロツーリズムプロジェクト」
への参加　30

⑪ 市販集音器を活用した補聴効果体験　32

⑫ 三鷹市の観光振興に向けた
「三鷹健康まち歩きマップ」の作成　34

■「第10回杏林CCRCフォーラム」を開催　35
■ その他の地域交流活動　36
■「杏林CCRC研究所」から
「地域総合研究所」に名称を変更　37
■「子育てラボワークショップ」を開催　37

地域との連携活動

自治体との連携　38

株式会社 アトレとの連携　41
～花と迎える年末年始

■ 2021年度 杏林大学公開講演会・公開講座　43

杏林大学における
地域交流活動のさらなる発展を目指して

学 長　渡邊　卓

本学は地域の医療機関を母体とした医療系の大学としてスタートを切っており、診療を中心として、地域と深く結びついた活動を展開して参りました。その後、人文・社会科学系の学部が創設され、新たな視点から地域連携、交流が行われることとなりましたが、このような経緯から、本学は元来、「地域」との親和性の高い大学であろうと考えております。

平成25年には本学が文部科学省「地（知）の拠点整備事業」に採択され、これを契機として、地域交流活動を全学的かつ体系的に実施するための体制が整備されることとなりました。補助事業は、最終的に令和元年度に終了しましたが、その後も引き続き、地域と連携したさまざまな活動が展開されてきております。ここに、令和3年度に実施された地域との交流活動について、報告書を作成いたしました。これらの交流活動は、協定に基づく連携自治体である東京都三鷹市、武蔵野市、羽村市をはじめ、多くの地域の皆様の絶大なるご支援のもとに実現が可能となったものであり、ご協力賜りました皆様には、改めて深く御礼を申し上げます。

さて、大学と地域との交流の意義については、さまざまな角度から、今一度、振り返ってみる時期に来ているようにも思えます。これまで行われた交流の中長期的な効果の検証なども興味深いところであります。そのような作業を通じて、大学と社会との交流を今後、より効果的かつ継続的なものとするための方策を探ってゆく必要があるものと考えております。

今後とも、皆様のご支援、ご協力を何卒宜しくお願い申し上げます。

地域連携と学生教育とが連動した
新たな取り組みへ

地域連携センター長　石井 博之

本学は地域社会により有益な貢献を果たすことを活動目的として、地方自治体などと連携をとり、医療系学部と社会科学・人文科学分野の学部を持つ総合大学としての特長を活かすため、2012年に「地域交流推進室」を設置しました。取り組みの内容も「生きがい創出」「健康寿命延伸」「災害に備えるまちづくり」などを軸に、社会貢献、教育、研究の質的向上に努めて参りました。また東京都内だけでなく、静岡県や秋田県、宮城県などの自治体との包括連携協定締結を結ぶこととなりました。

「地域交流推進室」設立から10年が経ちましたが、地域に必要とされることで多くの取り組みが継続、発展を遂げるとともにまた新たな取り組みも始まっています。その実例として、コロナ禍での子育て環境、初等・中等教育をサポートする仕組みの構築があげられます。また学部間連携によって観光分野へ保健学の健康科学や栄養学などの要素を取り入れ、日本の観光資源や文化をより有効なものにするための取り組みとしてのウェルネスツーリズムの取り組みも始まりました。このように学生教育と連動させながら取り組みを充実させ、拡げてきました。

そして2022年4月、学内の学部間・学科間連携や地域連携などを強化すべく、「地域交流推進室」から「地域連携センター」へ改称しました。私自身は長い間発展途上国で地域に暮らす障がい者の生活支援に携わってきました。その中で経済的には貧しくとも、人と人との強い結びつきと相互扶助の精神が、その地域の人々と共に暮らすことで、日々の生活が幸福感をもたらすことを教えられました。今後この経験も活かしていけたらと考えております。

このような流れの中で我々の取り組みも発展し、活動報告書にまとめることができたことを心からうれしく感じております。是非本報告書を御一読いただき、本学の活動に様々な形で御指導御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

地域を志向した
教育活動 ①

1年次科目「地域と大学」「社会と大学Ⅲ」開講
「地域における大学の役割」を学ぶ

本学では医学部・保健学部・総合政策学部・外国語学部の1年生が受講する科目「地域と大学」「社会と大学Ⅲ」を開講している。連携する三鷹市・羽村市・八王子市、産業界の職員や三鷹市や岩手県を拠点に活躍する活動家からそれぞれの地域の現状や課題・取り組みを学ぶ。全学部共通で開講してきたこの授業は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて、動画配信を取り入れつつ学部横断型で学ぶ形式は継続した他、「総合政策学部・外国語学部」「医学部」「保健学部」に分かれて行われた。

全学部共通、総合政策学部・外国語学部

地域に特化した内容で学部横断型の共通授業は、初めは全学部、その後3学部で受講し、後半は2学部で進めた。
各回の課題について各自で調べて考える機会を持つことにより課題解決に向けて主体的に動くための基礎を習得した。

授業回	日　程	学　部	授業形式	講　義　内　容	担当教員・講師
1	4/9(金)	医学部 保健学部 総合政策学部 外国語学部	遠隔授業（動画配信）	「地域と大学における学び」　オリエンテーション	古本泰之 教授（外国語学部）
2	4/16(金)			地域交流活動紹介ー1	石井博之 教授（保健学部）
				・羽村市健康寿命延伸のためのスポーツ機会提供プログラム	
				・だんだんばぁ　「コロナ禍の子供たちと子ども食堂」	加藤雅江 教授（保健学部）
				・石巻市での活動 「まちを耕し、ひとを育む（石巻・川の上プロジェクト）」	三浦秀之 准教授（総合政策学部）
3	4/23(金)			地域交流活動紹介ー2	冨田泰彦 教授（医学部）
				・医学部地域体験学習報告会（優秀班） 「自立性を養う褒め方・叱り方」	鈴木臨太郎氏（医学部）　高畑大樹氏（医学部） 田西風大氏（医学部）　寺村優輝氏（医学部）
				・志村ゼミの地域活動 -「コロナ禍での三鷹市内の店舗・施設への集客と新たな魅力発信の可能性の探索による三鷹市の地域活性化への貢献」-	志村良浩 教授（外国語学部） 渋川友梨氏（外国語学部）竹林真央氏（外国語学部） 陳桃子氏（外国語学部）　原田朋実氏（外国語学部） 丸山芽依氏（外国語学部）屋代実結氏（外国語学部）
				・アトレヴィ三鷹との連携事業（華道部）	楠田美奈 学内講師（保健学部） 水澤優菜氏（外国語学部）天野梨々香氏（保健学部） 金本愛輝氏（保健学部）
4	4/30(金)			三鷹市の現状と医療政策	朝野聡 准教授（保健学部）
				・三鷹市の健康福祉施策について～部の主要事業を通して～	小嶋義晃氏（三鷹市健康福祉部長）
				・高齢者施策について ～高齢者の現状と介護予防・日常生活支援総合事業～	小嶋崚太氏（三鷹市健康福祉部高齢者支援課）
				・地域ケアネットワーク推進事業	中山智博氏（三鷹市健康福祉部地域福祉課）
				・母子支援について	森典子氏（保健センター保健師）
5	5/ 7 (金)	保健学部 総合政策学部 外国語学部		三鷹市の防災対策について	朝野聡 准教授（保健学部） 田中二郎氏（総務部危機管理担当部長）
6	5/14(金)			「街の防災と一人ひとりのそなえ」	朝野聡 准教授（保健学部） 岡崎新太郎氏（三菱地所レジデンス㈱　防災倶楽部） 澤野由佳氏（三菱地所レジデンス㈱　防災倶楽部） 沢居佑樹氏（保健学部）　武田一努氏（外国語学部） 木原純一氏（外国語学部）原田佳子氏（外国語学部）
7	5/21(金)			三鷹市における地域活動　～若手活動家を交えて～	加藤雅江 教授（保健学部）
				・「シェアハウス『えんがわ家』が創る地域づくり」	若島慎兵氏（三鷹市生活環境部生活経済課）
8	5/28(金)			岩手県における地域活動　～地方と関わる～	古本泰之 教授（外国語学部） 石井博之 教授（保健学部）
				・「岩手で見つけよう、ホンキの自分 ～岩手の現状と課題・実践型インターンシップの紹介～」	八田浩希氏（特定非営利活動法人wiz） 落優介氏（NPO法人高田暮舎） 長野創氏（総合政策学部） 鈴木望記子氏（尚絅学院大学）
9	6/ 4 (金)	総合政策学部 外国語学部		羽村市と大学との関わり①	木暮健太郎 教授（総合政策学部） 井上亮太氏（羽村市企画総務部企画政策課） 平田歩氏（羽村市企画総務部企画政策課） 小泉恵美氏（羽村市企画総務部企画政策課）
				・「羽村市について」	
10	6/11(金)			羽村市と大学との関わり②	
				・「長期総合計画について」	
11	6/18(金)			羽村市と大学との関わり③	
				・「長期総合計画への学生アイディア紹介」	
12	6/25(金)			八王子市と大学との関わり①	古本泰之 教授（外国語学部） 樑津聡氏（八王子市市民活動推進部学園都市文化課） 落合恵理佳氏 （八王子市市民活動推進部学園都市文化課） 八王子市市民活動推進部多文化共生推進課
				・「多文化共生推進の取り組み・学園都市としての八王子市」	
13	7/ 2 (金)			八王子市と大学との関わり②	
				・「多文化共生推進の取り組み・学園都市としての八王子市」	
14	7/ 9 (金)			八王子市と大学との関わり③	
				・「多文化共生推進の取り組み・学園都市としての八王子市」	
15	7/16(金)			総括	古本泰之 教授（外国語学部） 木暮健太郎 教授（総合政策学部）

医学部

早期体験学習Ⅰは全学部共通授業の「地域と大学」、病院体験学習、地域体験学習、患者体験学習の4つの領域で構成されている。地域体験学習は、地域での活動に参加し、学ぶことを通して、文化的・社会的文脈のなかで人々がいかに暮らしているのか、いかに暮らしたいのかを理解することを目的としている。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響に鑑み、地域での活動を控え、「ハンセン病に学ぶ」をテーマとした代替プログラムを実施した。プログラム開始時は、ハンセン病について「知っている」という学生は17%、「聞いたことはあるが良くは知らない」という学生が70%、「聞いたことがない」という学生が13%であった。しかし、映画「あん」を視聴したり、学生が主体となってトークセッション「ハンセン病に学ぶ」を開催することを通して、それぞれの問題意識は多様になり、多角的に思考するようになった。その成果を「私たちの教科書ーハンセン病に学ぶー」としてまとめ、冊子を発行した。

【早期体験学習Ⅰ（地域体験学習）】

授業回	日　程	授業形式	講 義 テーマ	講　義　内　容	担　当
1	4/ 7 (水)	対面授業	早期体験学習Ⅰ	早期体験学習Ⅰ 全体のオリエンテーション	江頭説子 講師
2	4/ 9 (金)		地域体験学習①(1)	我が国の医療・福祉政策を辿りつつ、少子高齢化・人口減少という深刻な問題を抱えている日本の医療・福祉政策についての現状と展望を概説する	吉田正雄 准教授
3	4/14(水)		地域体験学習①(2)	地域体験学習①のオリエンテーション	江頭説子 講師
4	4/27(火)		地域体験学習①(3)	杏林大学医学部付属病院と周辺の医療・福祉施設との連携	塩川芳昭 教授
5	5/ 7 (金)		地域体験学習①(4)	フィールドワークの具体的な方法や注意事項について学ぶ。歴史的背景をまじえ、実際に行われたフィールドワーク事例についても紹介する	苅田香苗 教授
6	5/14(金)		地域体験学習①(5)	地域、コミュニティとは何か、地域における課題について概説 限られた空間での暮らしを想像する。☞テーマ「ハンセン病に学ぶ」 課題①：レポート執筆のためのメモ ・ハンセン病について調べた結果、関心を抱いたこと、課題だと感じたことを少なくとも10以上リストアップする。 ・そのなかで最も関心のあるものに◎をつけ、その理由について200字程度で記述する。	江頭説子 講師
7	5/20(木)		地域体験学習①(6)	地域の多様な世代、個性の方々との接し方について学ぶ　特別講師：大江朱実先生	
8	5/21(金)		地域体験学習①(7)	映画「あん」視聴　　於：大学院講堂	江頭説子 講師 冨田泰彦 教授 矢島知治 教授 関口進一郎 助教
9			地域体験学習①(8)		
10	5/28(金)	遠隔授業	地域体験学習①(9)	自学　課題①の提出をもって出席とする	
11			地域体験学習①(10)		
12	6/ 2 (水)	対面授業	地域体験学習①(11)	講義：なぜ、今、ハンセン病について考える必要があるのか ハンセン病をテーマに多角的に思考する方法　レポートの書き方、 問いのチャート、構成の説明、文献提示等 課題②：問いの設定、構成の提出　「ハンセン病に学ぶ―副題 各自でつける」	江頭説子 講師
13	6/11(金)	遠隔授業	地域体験学習①(12)	自学　課題②の提出をもって出席とする	江頭説子 講師 冨田泰彦 教授 矢島知治 教授 関口進一郎 助教
14			地域体験学習①(13)		
15	6/18(金)	対面授業	地域体験学習①(14)	講義と対話 対話のテーマ①：感情の<揺れ>と向き合ってみる　Formsで提出 対話のテーマ②：こんなことを考えています フィードバック①：感情の<揺れ>を整理するラップアップ フィードバック②：課題①をもとに多角的に思考するプロセスの提示 対話(ペア)による課題①に対するフィードバックの実践 トークセッションの企画・運営について	
16			地域体験学習①(15)		
17	6/25(金)		地域体験学習①(16)	学生主催によるトークセッション「ハンセン病に学ぶ」開催 ゲストスピーカー　国立療養所多磨全生園名誉園長　石井則久先生 テーマ：医師としてのハンセン病との関わり ゲストスピーカー　杏林大学医学部付属病院眼科医　重安千花先生 テーマ：眼科医としてのハンセン病との関わり 学生とのトークセッション	
18			地域体験学習①(17)		
19	7/ 2 (金)	遠隔授業	地域体験学習①(18)	自学　課題の提出をもって出席とする 課題③：レポート「ハンセン病に学ぶ―副題 各自でつける」	
20			地域体験学習①(19)		
21	9/ 6 (月)	対面授業	地域体験学習①(20)	活動の振り返り、報告会及びプレゼンテーション方法の説明	江頭説子 講師
22			地域体験学習①(21)	報告会の役割分担、諸注意の説明及びグループで報告会の準備	
23	9/17(金)		地域体験学習①(22)	グループで報告会の準備	
24	9/24(金)	遠隔授業	地域体験学習①(23)	地域体験学習代替プログラム報告会　9:30～16:00　(オンライン：Zoom) <午前の部> 1　ハンセン病の歴史 2　らい予防法について考える 3　なぜらい予防法の廃止は遅れたのか 4　感染症対応に関する国のあり方 5　ハンセン病患者の現在と昔ー法律と人権保護ー 6　ハンセン病に学ぶ隔離について 7　ハンセン病患者の隔離について 8　なぜハンセン病患者への差別や隔離はなくならないのか 9　隔離施設での暮らしを充実させるものーなぜ彼らは笑顔をみせたのかー 10　多様性を認める社会になるには 11　なぜ差別と偏見が起こるのか 12　なぜハンセン病患者に対する差別が生じたのか 13　なぜハンセン病がここまで差別や偏見の対象となったのか 14　ハンセン病と差別 15　なぜハンセン病患者は差別にあったのか 16　ハンセン病～未だ特効薬のない事実に苦しむ人々～ <午後の部> 17　なぜハンセン病に対する差別はなくならないのか ～歴史と法律から振り返る～ 18　国策だからといって攻撃していいのか 19　ハンセン病への差別はなくならない 20　正しい知識は我々に何を与えるのか？ 21　コロナとハンセン病の差別の比較 22　ハンセン病の世界比較 23　ハンセン病について多様な視点からの考察 24　ハンセン病の歴史が未来の私たちに伝えてくれたこと 25　ハンセン病のこれからの課題 26　ハンセン病が騒がれなくなったわけ 27　あなたと私～the chain～ 28　目指すべき医師像 ～ハンセン病に係った医師から学ぶ～ 29　医師ができる差別へのケア	江頭説子 講師 冨田泰彦 教授 矢島知治 教授 関口進一郎 助教
25			地域体験学習①(24)		
26			地域体験学習①(25)		
27			地域体験学習①(26)		

保健学部　看護学科

「福祉・地域と大学」は、前半第1回～8回の授業では複数学部での授業となる。地域における大学の役割、地域を取り巻く課題、これまでの本学の地域活動の紹介等を講義から学ぶ。保健学部で培う医療人としての専門スキルを家庭、学校、職場などのコミュニティにどのように活用していくかについて学ぶ。

第9回～第15回の授業では現代の日本人が抱える問題（少子高齢化、病とともに生きるということ、障がい者の社会生活への復帰、貧困や格差、虐待 等）をふまえ、暮らしに困難さを抱える人をどのように支えたらよいのか、大学がどのように関わるかを考え学んだ。

授業回	日　程	授業形式	講 義 内 容	担当教員
9	6/ 4 (金)	対面授業	イントロダクション 「医療職や教育職に就くものが社会福祉を学ぶ意義」	加藤雅江 教授
10	6/11(金)		少子高齢化 「少子高齢化によって起こる社会保障制度や介護、医療制度の課題等」	
11	6/18(金)		障がい者の社会復帰 「障がい者の社会復帰に向けての取り組みや障がい者福祉」	
12	6/25(金)		女性の社会進出とジェンダー 「女性の社会進出とジェンダーにおける社会問題の現状」	
13	7/ 2 (金)		子どもの貧困 「子どもの貧困とは何か。わが国の現状と各地域の取り組み」	
14	7/ 9 (金)		児童虐待と法制度 「虐待とは何か。また子どもにどのような影響を与えるか」	
15	7/16(金)		まとめ 「授業の振り返りと社会福祉において自身にできる取り組み」	

※授業第1回～第8回は他学部との合同授業 (P.4表参照)

医学部の授業成果をまとめた冊子

三鷹市における地域活動の紹介動画
シェアハウス「えんがわや」

地域を志向した
教育活動 ②

2021年度「高齢社会における地域活性化コーディネーター養成プログラム」開講

開講式・ガイダンス

4月3日(土)井の頭キャンパスにて、『高齢社会における地域活性化コーディネーター養成プログラム』の開講式を執り行った。

開講式では、地域交流推進室より古本泰之 室長、石井博之 副室長が登壇して歓迎の挨拶を行ったほか、大瀧純一大学長からもお祝いのメッセージが述べられた。今回は、新型コロナウイルスの感染を防止するため、時間を短縮して実施することとなったが、新しく大学に来られる方々を直接お迎えすることが出来たのは、大学側にとっても喜ばしいことであった。

今年度は三鷹市をはじめ、調布市や武蔵野市からも応募があり、全10名の履修生を迎えることとなった。履修生が大学内で充実した生活を送ることが出来るよう、1年間サポートしていく所存である。

このプログラムは、文部科学省の制定する学校教育法に基づく「履修証明プログラム」として実施しているもので、対象者は社会人（市民）としており、総時間数120時間以上のカリキュラムを修了し、本学による認定を受けた者に対して履修証明書が授与される。また、職業実践力育成プログラム（Brush up Program for professional）としても文部科学省の認定を受けて開講した。

授業 with コロナ

新型コロナウイルス感染症の拡大により、昨年度はオンライン授業との併用で進めてきたが、今年度は感染防止対策を施しながら、ほぼ対面形式に戻し授業を行った。

必修科目である特別講座Bでは、5月12日（水）に、杏林大学井の頭キャンパスで公開講演会「まちづくり物語」の第一弾を開催し、27名が参加した。講師には、地域活性化の分野で活躍されている大脇 聡氏（有限会社志多ら 代表取締役）を招き、テーマ「地域の人と文化をつなぐ太鼓プロ集団の試み」の講演をした。

講演では「志多ら」の活動紹介からはじまり、愛知県奥三河を拠点に活動するプロの創作和太鼓集団であり、地域に根づき伝統を受け継ぎながら新たな文化を創造していること、そして国の重要無形民俗文化財「花祭り（東薗目）」に「志多ら舞」を毎年奉納するなど全国各地で活動をしていることが述べられた。

活動当初は、縁があって愛知県北設楽郡東栄町の廃校を借用できたことから、稽古場・生活の場の拠点となり、メンバーも移住して東栄町民となったが、所謂、よそ者扱いを受けるなど様々な苦労があった。

「なぜ活動をするのか」「何を伝えたいのか」などチーム内で自問自答を繰り返しながらも、伝統文化である民衆の祭りは、地域のアイデンティティーを創りだす大切な役割を持っているという考えに至り、やがて活動の力の源になった。こうした考えや活動が、やがて地元住民からの理解を得られるようになり、祭りの一翼を担うだけでなく、地域の中心として受け入れられるようになった。

中山間地域だからこそ、できることを創造していくには、「人間力」(人材・創造・行動)「地域力」(文化・環境の魅力、住民と団体、そして行政の連携力)が大切であり、それが「求心力」となって人の心をひきつける魅力になると述べられた。120分の長丁場であったが、講演終了後も活発な質問が出るなど、講師は、談笑を交えながら一つ一つ丁寧に回答した。

6月9日（水）、杏林大学井の頭キャンパスで公開講演会「まちづくり物語」の第二弾を開催し、44名が参加した。講師は、小村 幸司氏（NPO法人 小さな村総合研究所 代表理事）を招き、テーマ「～蘇る関東で一番小さな村 ー魅力を作り出したのは？～」の講演を行った。

講演では、「村おこし」をはじめた経緯に触れ、50代の頃に「働き方や暮らし方を変えたい」との思いから、「地域おこし協力隊」に参加し、住民がわずか540人の山梨県丹波山村（たばやまむら）に移住したことがきっかけだった。丹波山村での生活は、8時半に役場に出勤し、5時15分に帰宅、昼休みは自宅に戻って家族と昼食、さらには学校行事がある日は、仕事を休んで参加し、地元住民にとってはそれが当たり前の生活であることに大変な衝撃を受けた。そこには、ひと昔前の日本にあった家族との団欒や地域住民同士の交流などの「当たり前」が残っていることに気づかされた。

活動に拍車がかかると同時に日本全国の「小さな村」にも興味を抱くようになり、各地の村を訪れたことが縁となり、日本の各ブロックで一番小さい村である①音威子府村（おといねっぷむら）（北海道）、②檜枝岐村（ひのえまたむら）（東北・福島県）、③丹波山村（関東・山梨県）、④北山村（近畿・和歌山県）、⑤新庄村（中国・岡山県）、⑥大川村（四国・高知県）、⑦五木村（九州・熊本県）の7村で構成された「小さな村g7サミット」（2016年）を開催するに至った。

このサミットの目的は、小さな村同士が互いの地域課題を共有し、課題に対して情報交換をしながら全国に向けて発信することだった。毎年各村を会場に巡回し、直面するテーマを掲げ、これまでに4回開催してきた。地域活性における活動では、さまざまな成功と失敗の経験を繰り返しながらも、

ここまでに至った苦労話についてユーモアを交えながら一つ一つ丁寧に説明をされた。

地域活性化の心得えとして学んだ意外なことは「既存の団体に頼らない」「予算は低予算」「少人数でのコアなアイデア」「賛同者を募り参加型を促す」「新しいことは少人数からスタート」「ＮＰＯ法人はつくる必要なし」であると述べ、多くの受講者の関心を集めた。講演終了後も、活発な質疑応答があり、充実した120分間の講演となった。

7月7日（水）18時からは、杏林大学井の頭キャンパスで、「公開ワークショップ　東日本大震災の被災地の声をもとに地域防災を考えよう！」を開催した。今回のワークショップは、本学が社会人講座として開講している「高齢社会における地域活性化コーディネーター養成プログラム」の講義の一コマを一般公開したもので、講座履修生の他、本学学生、地域の方々を合わせて27名が参加した。講師には、三菱地所レジデンス株式会社で「防災倶楽部」として活動している岡崎新太郎様、澤野由佳様、平澤龍一様をお招きした。

講義は三菱地所レジデンスが製作した「そなえるカルタ」と「そなえるドリル」を用いながら、東日本大震災の被災者の方から聞いたリアルな体験談や、講師陣が取り組んでいる防災訓練の説明や事例紹介がなされた。特に被災生活のトイレ問題は切実であり、現時点でしている備えや対策、事例を聞いての気づき、新たに必要だと思った備えや今日から何を始めるかについて考えていった。その内容を参加者全体で共有するとともに、家族や大切な人、地域コミュニティのことを想像しながら、日頃の備えと人や地域との繋がりがいかに大切であるかということを再認識することができた。

参加者からは災害時のトイレの重要性や災害の備えについて深く考えることができたなど感想が寄せられた。

修了式・意見交換会

3月16日（水）井の頭キャンパスにて「高齢社会における地域活性化コーディネーター養成プログラム」の修了式を実施した。

式には、大瀧純一 学長、古本泰之 地域交流推進室室長のほか、坂本ロビン 外国語学部長、石井博之 地域交流推進室副室長、井上晶子 地域交流推進室特任講師が出席し、履修生の新たな門出をお祝いした。

履修証明書授与のあと、大瀧学長から式辞が述べられ、大瀧学長は、「現役大学生とともに学ぶことは、楽しい半面、体力的にも精神的にも苦労を感じた部分が多々あったことと思う。杏林大学で得た様々な知識、経験を活かして、これからも『地域のリーダー』として第一線で活躍していただきたい。」と、履修生の今後に期待を込められた。

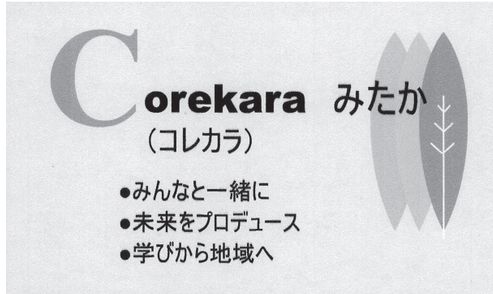
昨年度はオンライン形式で修了式を行ったため、対面形式での実施は2年ぶりとなった。まだまだ全国的に予断を許さない状況ではあるが、こうして直接顔を合わせ、履修生を送り出せたことは大学にとっても大変喜ばしいものとなった。

修了生からは、「講座をとおしていろいろな角度から地域について学びたいと思うようになった。自分の住んでいる地域のことも深く知っていきたい。」「修了生の中から有志が地域活動を行うための自主組織を立ち上げた。これまでの学びをどのように地域に還元していくかメンバーで話し合いながら進めていきたい。」といった意見を聞くことができた。

講座修了生の有志による活動団体発足

2022年3月13日、地域活動団体「Corekara（コレカラ）みたか」が本プログラム修了生の有志により設立された。この集まりは、「高齢社会における地域活性化コーディネーター養成プログラム」を修了した方の中から、学びを実践活動に繋げていこうとする有志が立ち上げた会である。

「好きなことを、無理をしないで、焦らずゆっくりと、和気あいあいと」を活動方針として、会の目的や方針に賛同を得られた方々と活動を進めていく予定である。



地域活動団体「Corekaraみたか」

開講式

特別講座B

地域を志向した
教育活動 ③

地域・地方からの学び

● NPO法人wiz（岩手県）との連携

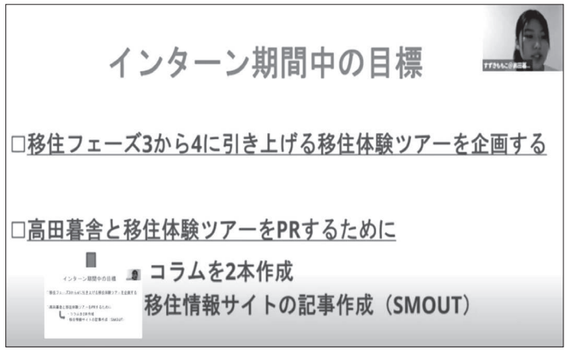
本学は、岩手大学が事業責任大学になって進めた「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」の「ふるさといわて創造プロジェクト」事業に2015年度から取り組んだことにより、岩手県内の地元企業等で実践型インターンシップを展開しているNPO法人wizとの連携が始まり、学生達に地方地域の現状を学ぶ機会を提供している。

NPO法人wizは学生が地域を理解し成長できる実践型インターンシップのコーディネートをしている団体であり、首都圏大学の学生が地方の現状や地元企業の経営者から地域の仕事に対する理解や課題解決法を学ぶ機会となるため、継続的にインターンシップの情報を提供してきた。

2021年度には、外国語学部3年の学生1名が岩手県陸前高田市の移住定住促進の事業パートナーとして活動している団体でのインターンシップに参加した。コロナ禍の影響もあり、岩手県で体験することができない時はオンラインも利用しながらの研修となった。研修を終えた学生からは、「卒業後は出身地に戻って地元の活性化に尽力したいため、岩手でのインターンシップに申し込んだ。企画を考えることは非常に大変で難しくもあったが、温かく迎え入れられて何とか過ごすことが出来た。地域は違うが出身地に戻った時に、岩手での経験を生かしたい。」と伝えられた。地方で実践的に地域の方と繋がることで新たな交流や学びが経験できた良い機会となったようだ。

外国語学部古本泰之教授が担当する外国語学部の授業内では、夏休みIWATE実践型インターンシップ、春休みIWATE実践型インターンシップの紹介機会を提供した。

岩手県での体験



参加した学生（右上）のオンライン発表

本学学生（中段左）

杏林CCRC指定研究活動
①健康寿命延伸

杏林大学のシーズを地域の街づくりへ展開する総合的研究

■実施日：2021年4月1日～2022年3月31日
■担当者：長島　文夫　医学部 腫瘍内科学 教授
古瀬　純司　医学部 腫瘍内科学 教授
前野　聡子　医学部 腫瘍内科学 実験助手

研究目的

健康寿命延伸を目標とし、がんおよび生活習慣病を抱える患者と家族を支えるために地域社会が工夫できることを提案し、医療・教育・研究開発を推進する。

研究の背景

杏林CCRC研究所は、2021年に杏林大学地域総合研究所と名称を変更し、研究テーマとして生きがい創出、健康寿命延伸、災害に備えるまちづくりのほかに、ウェルネスツーリズムを加えている。2021年度、長島担当のプロジェクトとして、ロボット介護機器導入マニュアル案の活用、がん教育、患者見守りのためのアプリケーション開発を行った。また、「調布スマートシティ協議会」が、調布市、電通大、調布アフラック、NPO調布市地域情報化コンソーシアムにより設立され、持続発展可能な街づくりが始まっていることを受け、医療系学部を持つ杏林大学として、ヘルスケアサービスといった視点で情報を共有した。今後は、アカデミアのシーズを地域に展開させるプロジェクトを工夫して地域の街づくりに協力していく予定である。

研究内容及び研究結果

1. ロボット介護機器導入マニュアルの活用

「ロボット介護機器の科学的効果検証研究」（AMED ロボット介護機器開発・標準化事業）において、三鷹世田谷地区で得た「ロボット介護機器の効果的活用」のデータを反映した移動支援・排泄支援・入浴支援のマニュアル（案）としてまとめた。現在、経産省/AMEDが主催する「介護ロボットポータルサイト」や研究代表者施設の大学内病院のサイトにてダウンロード可能になっている。

三鷹世田谷地区等の実際の訪問診療医や介護関係者に本ロボット介護機器支援マニュアルを紹介した。ロボット介護機器を検討・導入の際に参照いただき、また有効な活用法については、今後、保健学部等の専門家の意見も組み入れて工夫を行う。

2. がん教育を通じて、地域社会へ健康教育を展開

小中高校で、健康教育の一環として「がん教育」が行われている。我々がん医療に従事する教育者も東京都から依頼を受けて、対応してきた。2022年度は小金井市の高校から依頼を受け、出張授業として教育支援を行った。事前アンケートにより、がんについての基本的な知識を確認することで、例えば、理解度の低い就労に関する項目など、重点をおいて内容に反映した。また、養護教諭と相談して家族や知人の健康状態にも配慮した。授業後の生徒からのアンケートにおいては、がんの予防と治療の意義への理解が深められたといった感想が寄せられた。

第10回 杏林CCRCフォーラム（2022年3月12日）では、「がん教育のこれから」を取り上げ、長島、中島恵美子保健学部教授、橋詰崇課次長から講演を行い、これまでの取組みについて紹介した。今後は、開発したアプリを事前学習に用いるなど、効果的な協力を行うことを予定している。

3. 患者見守りのためのアプリケーション開発

新型コロナウイルス感染症の影響もあり、遠隔診療や訪問診療のニーズが増している。AP TECH（株）が行っている岩手県八幡平市メディテックバレー推進事業において、遠隔診療・遠隔見守りに関する事業に対し情報共有を行った。岩手県では常勤医不在の診療所をスマート診療所として、ICTを活用した見守りについて実証実験を行っている。都市部と地方での違いに配慮して開発を継続する予定である。

4. 調布スマートシティ構想との連携

地域の街づくりといった視点で調布スマートシティ協議会と地域交流課で情報交換を行った。これまでに杏林大学地域総合研究所が展開してきたヘルスケアサービス、都市災害等の視点を組み入れた街づくりに協力できると考えている。地域の街づくりを目指して、アカデミアのネットワークを強化し、産官学民連携を継続する。

杏林CCRC指定研究活動
②少子高齢社会像の構築

子育てにおける地域内での「つながり」構築に向けた実践研究

■実施日：2021年7月1日～2022年3月31日
■担当者：加藤　雅江　保健学部 健康福祉学科 教授
古本　泰之　外国語学部 教授
小林　賢子　保健学部 准教授
前野　聡子　医学部 実験助手
宇山　陽子　三鷹ネットワーク大学推進機構 常務理事
田辺　伸一　三鷹ネットワーク大学推進機構 主任

研究の背景および目的

研究の目的は、社会が危機的な状況に陥った際に必要となる子育て支援のあり方を、地域内でのつながり（ネットワーク）構築の場づくりという視点から、実践を通じて明らかにすることにある。

2019年12月に中国湖北省武漢市で発生した新型コロナウイルス感染症は、複数回の緊急事態宣言発令を経てワクチン接種が進む現在においても依然として日常生活の脅威となっている。事態が長期化する中でさまざまな課題が生じているが、地域社会においては特に子育てについて深刻な状況が浮き彫りになってきた。それを受けて子育て支援の在りようも変化している。公的なサービスはアウトリーチ型での支援は難しく、緊急事態宣言の発出などの影響を受け、普遍的な場の提供、サービスの担保が困難となっている。このような状況下で、子育ては家庭の中で他者とのつながりなく行わざるを得なくなっている。子どもと養育者が外とのつながりなく自宅で過ごす時間が増えることにより、ストレスを抱え虐待が増えることなどが懸念されていたが、結果として統計上もDVや虐待が増え、若者や女性の自殺が増加していることから、女性や若者の生きづらさが「家」に持ち込まれていることが想定される。申請者はこれまで、地域内でのつながりによる子育て支援活動に取り組んできた。そこで本研究は、コロナ禍の1年間を経た子育ての現状および課題を、ヒアリング調査・文献調査を通じて明確化した上で、実践から研究にフィードバックする取り組みの一環として地域住民を対象としたワークショップを開催し、地域内でのつながり（ネットワーク）構築に向けた「集い」が子育て支援にもたらす有効性について分析を行う。

研究内容

①コロナ禍での各家庭・地域における子育ての現状・課題を明確化する調査の実施

調査は、申請者が関係を持つ町会所属者ならびに教育関係者へのインタビューに加えて文献・資料分析によって行う。

②子育て家庭の孤立を防ぐためのワークショップ実施

子育て家庭の孤立を防ぐために、家庭や養育者がSOSを出すことを肯定的に捉えられるような地域住民を対象としたワークショップを2回程度開催する。その際に参加者を対象とした意識調査を合わせて行い、地域内に子育てに関するつながりづくりの場を新たに構築することが地域社会における子育て支援に貢献する可能性について明らかにしていく。

【研究（活動）の実施内容】
●日時　①2021年9月22日（水）16時から17時
三鷹市中原3丁目都営住宅集会所
②2021年11月28日（日）14時から16時
三鷹市井の頭コミュニティセンター

子育て支援に関するワークショップの開催。井の頭一丁目町会の活動である「ママと子どものブックカフェ」およびNPO法人「居場所作りプロジェクトだんだん・ばぁ」、NPO法人三鷹ネットワーク大学との共催により開催

NPO法人「ぷるすあるは」が作成した『ゆるっとこそだて応援ブック』を活用し、地域住民に対して、子育ての現状と課題、地域における子育て支援などに関する意識調査を行い、地域内に子育てに関するつながりづくりの場を設けることの有効性について検討した。

●参加者　①10名（子育て当事者2名、地域関係者3名、本学関係者2名、学生3名）
②19名（子育て当事者15名、地域関係者2名、本学関係者1名、学生1名）

現状と課題

新型コロナウイルス感染拡大の影響により大人も子どもも生活環境が変わり、ストレスを抱えることとなった。この状況変化により、家庭内に問題を抱えながらもなんとかバランスを保ち生活を維持してきた「家」に歪が生じ、コロナ禍により課題が表面化することとなった。問題は家族の中に押し込まれ「家」の孤立を促進した。

ワークショップにおいても子ども・養育者双方にストレスが生じ、新たな生活や仕事の在り方を考えるきっかけとなっていた。このような現状を踏まえ地域の中で子どもを育てることを共に行うことができる仕組み、子育てを側面的にサポートするサービスの在り様を引き続き調査していく。そしてこの視点を子ども虐待を未然に防ぐことに生かしていくことが重要である。

杏林CCRC指定研究活動

③健康寿命延伸

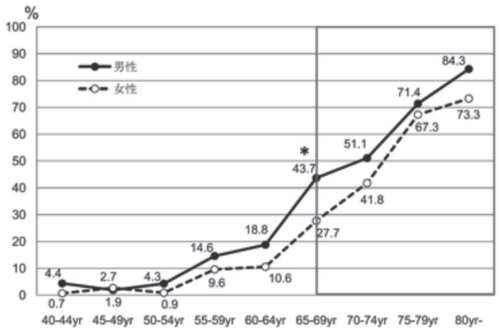
難聴を伴う高齢がん患者への意思決定支援サポートに関する研究

■実施日：2021年4月1日〜2022年3月31日
■担当者：水谷　友紀　医学部 総合医療学 学内講師

研究の背景

「令和元年版高齢社会白書」によれば、令和元年における65歳以上の高齢者人口は3,558万人であり、総人口に占める割合（高齢化率）は28.1%となった。人口の高齢化は世界的規模で進んでおり、2040年までに世界の平均寿命は80歳に至ると予想されている。がんは加齢に関係する疾患であるため、人口の高齢化に伴って、がんを罹患した高齢者（以下、高齢がん患者）の割合は増加し、2030年までに、がん患者の約70%が65歳以上の高齢者になると見込まれている。

高齢化社会が進むにつれ、老人性難聴も増加している。日本において、老人性難聴の有病率は、男性では、65〜69歳：43.7%、70〜74歳：51.1%、75〜79歳：71.4%、80歳以上：84.3%であり、女性では、年齢群順にそれぞれ27.7%、41.8%、67.3%、73.3%と推計される。昨今、医師と患者との十分な情報を得た（伝えられた）上での合意を指すinformed consentや、医療者と患者が科学的な根拠を共有して一緒に治療方針を決定するshared decision makingの重要性が叫ばれているが、老人性難聴を併発している高齢がん患者には、医療者からの説明が十分に伝わっていない可能性がある。また、難聴をひきおこす薬剤（白金製剤など）もあり、治療開始前は難聴がなくても、治療後に難聴をきたす患者もいるため、老人性難聴を併発している高齢がん患者に病状説明をする際には特別な配慮が必要である。



しかし、この問題については世界的にもガイドラインは存在しないため、難聴に配慮されないまま病状説明が行われることが多い。一方で、医療者が独自に工夫をして病状説明を行っていることもあり、当科では、難聴を伴う高齢がん患者に病状説明する際にいくつかの機器を用いている。

研究目的

難聴を伴う高齢がん患者に病状説明をする際に用いている機器のメリット・デメリットを記述し、難聴を伴う高齢がん患者に病状説明をする際の具体的な方策を提案すること

研究方法

研究代表者が高齢がん患者を診察する際に用いている以下の機器のメリット・デメリットを記述する

1.集音器
2.ネックスピーカー
3.音声の文字おこし

研究結果

以下、それぞれの機器のメリットとデメリットを詳述する

1. 集音器
（ハビナース もしもしフォン®：ピジョン株式会社など）

【メリット】
1) 集音して聞くことができる
2) 簡便であり、置き場に困らない
3) 比較的安価（2,000円以下）である
【デメリット】
1) 0.5 m以内まで患者に近づく必要
2) 難聴を有することの自覚がない患者には使いづらい（使用を拒否される）
3) 新型コロナ禍により、接近することに拒否感のある患者には使いづらい

2. ネックスピーカー（JVCケンウッド®）

【メリット】
1) 患者の肩に載せたスピーカーから、医療者の説明が直接聞こえる
2) 同席者にも医療者の声が届く
3) 音量の最大値が最も大きい
【デメリット】
1) 最軽量でも100 g程度と重さがある
2) 充電や置き場の確保が難しい
3) 比較的高価（1〜3万円程度）
4) 接触する機器に対して拒否感のある患者や医療者には使用しづらい

3. 音声の文字おこし
（iPad®、iPad用アプリであるTexter®）

※右の例は変換が不適切（「シューズ」→「手術」）

【メリット】
1) 音声を視覚化できる
2) サイズの小さいデバイスは患者が持つことができ、サイズの大きなデバイスは同席者もみることができる
【デメリット】
1) iPadなど高価なデバイスが必要
2) アプリによっては医学用語の変換が不適切（今回はTexter®を使用）
3) 患者が、医療者の顔を見ず、画面に見入ってしまう

結論

それぞれ機器にメリット・デメリットはあるものの、これらの機器を使用することで、患者の理解は良くなることが経験された。また、これらの機器を使用することを患者や患者家族に伝えることで、患者の難聴に医療者が配慮していることが伝わるため、確実にコミュニケーションがとりやすくなる。これらの機器を積極的に使いSDMを行うべきであると考える。

杏林CCRC指定研究活動

④ ウェルネスツーリズム

「杏林型ウェルネスツーリズム」の構想立案と実施およびその妥当性検証の研究

■実施日：2021年7月1日～2022年3月31日
■担当者：石井　博之　杏林CCRC研究所 兼任研究員
小堀　貴亮　杏林CCRC研究所 兼任研究員
北出　恭子　杏林CCRC研究所 客員研究員
古本　泰之　外国語学部 教授
大久　朋子　保健学部 准教授

研究の背景および目的

2013年に杏林大学が採択を受けた文部科学省『地(知)の拠点整備事業』(大学COC事業)および同省『地(知)の拠点大学による地方創生推進事業』(COC+事業)では、大学の教育・研究・社会貢献の「全学的地域志向化」を進めてきた。その過程の中で各学部・学科がそれぞれの専門性を活かした取り組みが発展してきた。

今回その取り組みの一環として、保健学部、外国語学部観光交流文化学科の教員が主体となり「ウェルネスツーリズム」の推進に取り組むこととした。本研究におけるメンバーは健康寿命延伸と運動、栄養と運動、観光学、温泉の専門家で構成されている。そして静岡県東伊豆町、愛知県田原市を対象地域とし、JTB、近畿日本ツーリストなどと連携することとなった。

今年度は新型コロナウイルス感染拡大などの影響により現地調査が困難など制約があったが地方自治体や観光業関係者と協議を進め、今後の取り組みの方向性を検討したので報告する。

現状報告と今後の計画について

今年度は主に東伊豆町や田原市の関係者と我々が協議をおこない、今後の方向性を検討した。現地調査実施は3月26日の愛知県田原市での1回であったが実現することができた。

今後まだ検討の余地があるが、現時点のウェルネスツーリズムにおける個別の取り組み計画は以下のとおりである。

1)ウェルネスツーリズムに対する我々の取り組みの方向性について(図1)

① 我々の専門性を活かしたウェルネスツーリズムの策定をすること。

荒川らによると、ウェルネスツーリズムとはヘルスケアアプローチであり、旅を通じて健康を基盤としたライフスタイルを総合的にデザインしていくための有効な縦断の一つとしている。しかし今までのウェルネスツーリズムやヘルスツーリズムは主に温泉活用を主体としたもの(スパツーリズム)が多い。[1)]　日本理学療法士協会も新しい取り組み、職域拡大の観点から理学療法士の「ウェルネスツーリズム」への取り組みを提唱し、その主な実践例として、「鹿教湯温泉」の取り組みが報告されている。また現在世界中で行われているウェルネスツーリズムのほぼ半数(47%)はスパツーリズムであるとの報告がある。[2)]

我々の取り組みも日本の観光資源である温泉の活用と効果の検証は十分に考慮にいれる。さらにそれぞれの観光地の持ち味を活かし、我々の専門領域を活かして以下の要素をウェルネスとして加えていくことにした。

② 誰もが受け入れられ皆で楽しむことができる観光のあり方をそれぞれの地域で確立すること。

障がいや介護の必要性の有無、年齢、嗜好性などの多様性を考慮し、より多くの人が楽しめ、更に健康増進や幸福感を享受できる観光プログラムを構築することとした。観光地、観光施設のバリアフリーとユニバーサルデザインの導入。まずはより汎用性のある評価手法の規格化から開始した。

③ 観光の過程で健康を享受し、その後の生活に活かせる体験ができる食事の提供。

食事を楽しむだけでなく、一つ一つの食材と健康への理解を促し、その後の生活に活かせるような体験ができることを目指すこととした。

④ 観光地の温泉以外のリソースも活用した複合型ウェルネスツーリズムの策定。

観光や温泉だけでなく、リクリエーション、スポーツ、マインドフルネス、リラクゼーション文化活動など様々なその土地ならではのアクティビティの提供を目指すこととした。

2)対象地域の特徴

① 静岡県東伊豆町(図2)

静岡県賀茂郡東伊豆町は伊豆半島東海岸中央部に位置する人口11,881人(2020年9月30日現在)、総面積77.81K㎡の温泉町である。町内には天城山系の最高峰・万三郎岳を有しており、一帯には伊豆東部火山群の一部が形成され、豊かな自然景観に恵まれている。

面積約125haにも及ぶ広大な「稲取細野高原」をはじめ、高台から伊豆七島を望む大パノラマ眺望など、絶景ポイントが多数存在しており、特に、伊豆半島創世記の痕跡と火山による複雑な地形は、世界ジオパークの一部を構成しており、ジオサイトとしても注目されている。

気候は年間を通じて温暖で過ごしやすく、真夏においても極端な猛暑になることがほとんどないことから、山間部は別荘が建ち並ぶ避暑地となっている。恵まれた自然環境の中、山葵やみかんいちご等の栽培が盛んであり、「みかんワイン」など様々なかたちで山の幸を堪能できる。

一方、海の幸としては、稲取漁港において日戻り操業で水揚げされた一本釣りの金目鯛「稲取キンメ」があり、日本一美味しい金目鯛として全国的な知名度を誇る。その他、イセエビ、サザエ、テングサの特産品があり、豊富な海の幸も町中の様々な店で堪能できる。

さらに、貴重な歴史文化観光資源も数多く存在する。例えば、当該地域を通る古道「東浦路」は、平安時代から大正時代にかけて、小田原～下田間の伊豆半島東海岸を通っていた街道であるが、街道沿いには「道祖神」や「道しるべ」、「江戸城築城石採石跡」などが点在し、ヘリテージツーリズムの舞台となっている。

② 愛知県田原市(図3)

愛知県田原市は、県の南端部、渥美半島のほぼ全域に位置する、人口60,892人、面積191.12K㎡の自然豊かな都市であり、農業、観光、工業、水産業などが盛んな地域として知られている。

特に、市町村別でトップクラスの農業産出額を誇り、電照菊などの花奔、キャベツなどの野菜、メロンやいちごなどの果樹、肉用牛・豚などを中心に全国でも有数の一大農業地域となっている。

一方、三河湾国定公園および渥美半島県立自然公園の一部を構成する同市は、市域の約94%が自然公園区域に指定されており海に囲まれた渥美半島特有の自然環境とともに、伊良湖岬、恋路ヶ浜大石海岸(太平洋ロングビーチ)、蔵王山など、風光明媚な観光資源に恵まれている。

太平洋ロングビーチなどの海岸地域では、一年を通じてサーフィンに適した波があることで知られており、全国有数のサーフィンスポットとして全国から多くのサーファーが訪れるとともに、サーフィン世界大会や国内大会なども開催されている。その他、トライアスロン、サイクリングをはじめとするスポーツツーリズムなども盛んであり、世代を問わず多種多様な体験型観光を楽しむことができる観光地域が形成されている。

まとめ

今回報告した今後の計画は、2ヵ所の対象地域関者と協議が始まったばかりである。また今年度は新型コロナウイルス感染拡大などの影響により、現地調査が困難であった。

今回は多種多様な取り組みの方向性を記述したが、全ての実現を目指しているのではない。今後は対象地域関係者や地域住民との連携を図りながら地域性を活かし、我々の専門性がウェルネスツーリズムに貢献できるように模索していきたいと考えている。

引用文献
1)荒川雅志(2017)・ウェルネスツーリズム
～サードプレイスへの旅～　フレグランスジャーナル社
2) Global Spa&Wellness Summit(2013)

図1　全体像

図2　東伊豆町の全体像

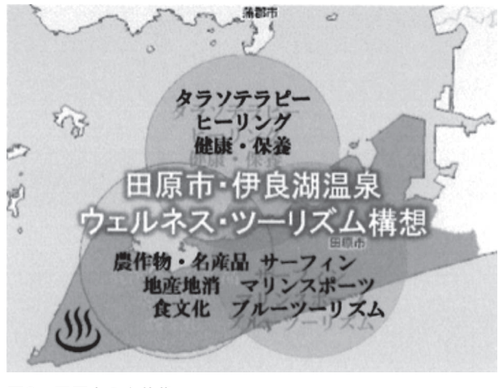


図3　田原市の全体像

杏林CCRC指定研究活動

⑤災害に備える
まちづくり

東日本大震災からの教訓と首都直下型地震への備え：米国ポートランドとの協業

■実施日：2021年7月1日～2022年3月31日
■担当者：三浦　秀之　総合政策学部 准教授
佐々木秀之　宮城大学 准教授
西芝　雅美　ポートランド州立大学 教授
伊藤　宏之　ポートランド州立大学 教授

研究の背景および目的

【研究におけるこれまでの経緯】

杏林大学ではポートランド州立大学とMOUを締結している。そうしたなかで、相互の交流を深化させるうえで、研究における相互交流が一つのきっかけになることが考えられる。ポートランド州立大学のあるオレゴン州では、近い将来、オレゴン州において大震災が起こることが予測されることが米国連邦政府による報告書に記載され、こうした背景からポートランド州立大学の研究機構であるパブリックサービス研究・実践センター(The Center for Public Service)の研究所として伊藤教授が率いるInitiative for Community and Disaster Resilience (ICDR)という災害とコミュニティに特化した研究所が設置され震災を含む災害に関する興味関心が高まっている。

そうしたなかでICDRと杏林大学では、2017年度より、東日本大震災の教訓を学ぶためのプログラムを実施している。両校では、"Learn From Each Other"を理念に掲げ、日本とポートランドが共に災害に備えるまちづくりを学び合うことを目的とし、両校のスタッフ及び学生たちによる日本と米国の往来が続いた。その一つの成果が、2021年3月13日に開催された第9回杏林CCRCフォーラム「災害に備えるまちづくり」であったと考える。本プログラムは、5年間継続的に実施予定であったが、昨年度は、コロナ禍の中で交流が途絶えた。しかし、オンラインでの交流が続けることができた。

【研究の目的】

本研究では、東日本大震災において「自助」「共助」「公助」がいかにして機能したのかを掘り下げるとともに、これから震災が起こる可能性が高い地域ではこれらを機能させるためにいかなる対応が現在なされているのかを考察してきた。

コロナ禍で移動などが難しい状況ではあるが、今年度のプロジェクトでは、フィールドワーク及び各自治体の行政に赴きヒアリングを実施し、同時に、ポートランドとオンラインで繋げ、オンラインのヒアリングも共同で実施できればと考えていた。

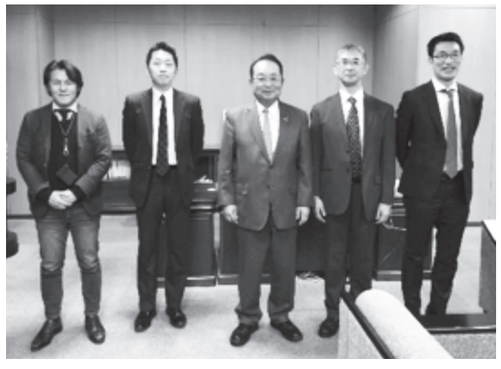
また、コロナ禍で米国との行き来は引き続き難しいことが予想されるが、状況が落ち着き、渡航が可能になった段階で（米国はワクチン接種が進み、徐々にコロナの感染拡大が落ち着きを見せ始め、実際、本年度9月からポートランド州立大学では講義を再開するという）、状況が許せば、2022年2月～3月の年度末にポートランドに訪れ、実際に現地に赴き、昨年度予定していた「そなえるドリル」の英語版を用いた企画及び検証会を実施し、知見を互いに学び合うことを検討できればと考えていた。

研究成果

新型コロナウイルス感染症の拡大により、遠隔地への移動が制限される中で、また現地での感染拡大に憂慮する声も多く、フィールドワークなどは断念せざるを得なかった。また、米国ポートランドへの渡航も同様である。ただ、そうした中で、本研究をきっかけに発展した展開が生じた年度でもあった。具体的には下記の点である。

【宮城県石巻市との包括連携協定の締結】

本研究を具体的に協力してくれていた石巻市復興政策部の尽力により、これまでの経緯を踏まえ、杏林大学と石巻市による包括連携協定が2022年3月29日に締結された。これにより、本学と石巻市における多様な連携が可能になると考えられる。



石巻市長、斉藤正美氏（中央）を本学関係者が訪問

地域における
研究活動

日本人に理想的な気管カニューレ開発を目指した産学連携シーズ創出事業

―超高精細CTによる生体内に留置されたカニューレの可視化と適正の検証―

■実施日：2021年4月1日～2022年3月31日
■担当者：齋藤 康一郎　医学部 耳鼻咽喉科学 教授
宮本　真　医学部 耳鼻咽喉科学
学内講師（現講師）

研究の背景および目的

超高齢社会を迎えている本邦において、病院や療養施設、そして自宅介護の現場で気管切開カニューレを装着した患者数は増加している。さらに、近年、外科的気道確保として100年以上の歴史がある外科的気管切開術（ST）に加え、主としてICUにおいて麻酔科医師が施術する術式として経皮的気管切開術（PDT）が広まってきたことで、PDTにも対応し得る、時代に適したカニューレが世界的に模索・開発されている。このような現状では、カニューレの適切な管理に関する啓発活動に加え、日本人に理想的な特性を有したカニューレの開発が急務である。カニューレの特性には、形状、PDTキットとの適合性、カフの有無と性状、内筒や声門下の吸引口の有無、フランジの形状や調節の可否、発声のための側孔の有無や素材と多くの要素がある。一方臨床の現場では、急性期病院での気管切開の後、選択肢が限定的な、各病院に採用されているカニューレを装着した状態で慢性期病院や療養施設あるいは自宅へ退院となり、その後に様々な合併症が引き起こされている。2018年に、気管切開後の死亡事故の再発防止に向けて日本医療安全調査機構が警鐘を鳴らした提言の中でも、適切なチューブの選択や、術後のチューブ位置の確認の重要性が記載されている。加えて、国や地域による体格差を踏まえたカニューレのデザインは、世界的にもこれまでなされていない。

この現状の打開には、まず患者体内のカニューレの精細な状態を客観的に把握し、安全が担保された状態で管理を行い、将来的には日本人に様々な特性が最適化されたカニューレを開発する必要がある。本研究では、気管切開患者における体内のカニューレの形状や周囲組織との位置関係につき、高解像度で可視化可能な超高精細CT（UHRCT）画像を用いた検証を行う。UHRCTは、0.25mm×160列の撮像により、空間分解能の高い画像を得ることができる装置である。患者体内に留置された気管カニューレの状況を精細に可視化することで、解決すべきカニューレの特性を明らかとし、産学連携で日本人に適したカニューレを開発するためのシーズの創出を目的として本研究を立案した。

研究方法

UHRCT画像を用いた上気道の形状・サイズ測定の第一歩として、成人の喉頭サイズの計測を行った。対象は成人40例（男性30例、女性10例）の、甲状軟骨、輪状軟骨に変形を認めない症例とし、a)甲状軟骨前縁の高さ、b)甲状軟骨板側面の高さ、c)甲状軟骨の湾曲度、そしてd)輪状軟骨前面の高さ、輪状軟骨内腔のe)前後径とf)左右径を測定項目とした。引き続き、気管切開後の2症例（男女各1例）につき、頸部のUHRCT撮影を行い、得られた画像を用いて生体内の気管カニューレならびに気管壁の状況に関する評価を行った。評価項目は、g)カニューレの各パーツの再構築画像における再現性、h)気管内のカフの形状、i)カフと気管壁の関係、j)カニューレと気管壁の関係とした。

なお、撮影した頸部の画像データは、医療画像処理ワークステーションZIOSTATIONに送り、喉頭、器官、気管切開tubeの3D画像の再構築処理を行った。

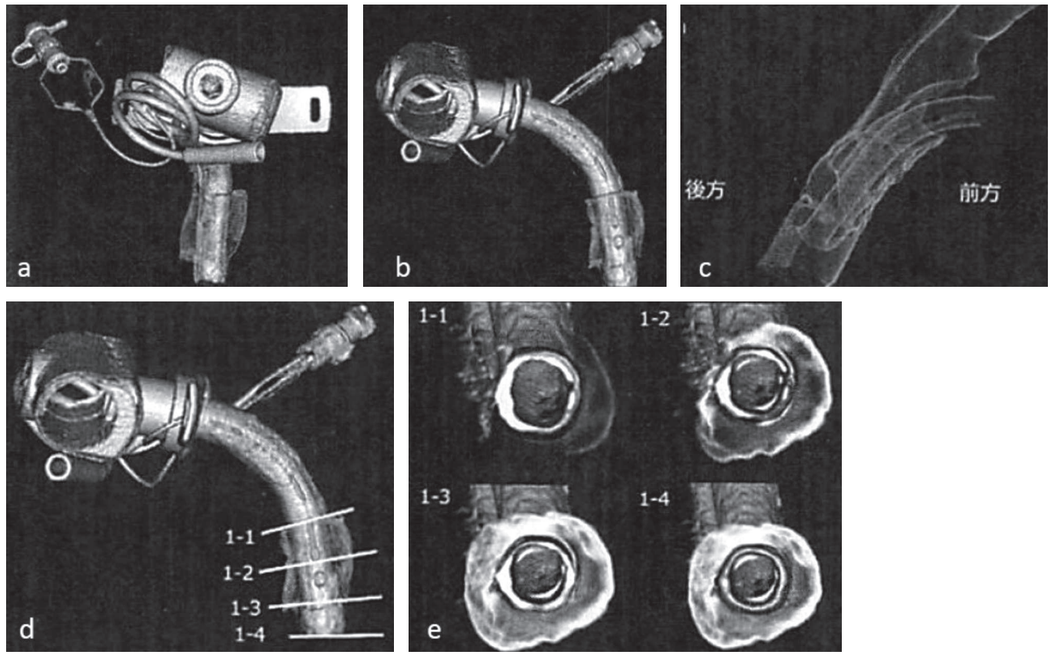
研究結果

【「地域活性化」「地域課題解決」などへ寄与した点を含めた活動の成果や達成状況】

成人の喉頭サイズは、計測の結果、男女それぞれa)14.8mm、10.5mm、b)右で32.7mm、22.7mm、c)61.5度、79.0度、d)5.9mm、4.1mm、e)19.3mm、15.1mm、f)18.2mm、13.8mmであった。この成果は、第72回気管食道科学会にて発表した（超高精細CT再構築画像から計測した喉頭サイズの検討.宮本真, 齋藤康一郎, 中川秀樹）。さらに、生体内のカニューレを評価したところ、g)カニューレのネックプレート、カニューレ、カフ、インフレーションラインならびに吸引ラインが明瞭に描出され、h)カフ圧計で25 mmH2O前後に調節されたカフの形状は患者毎に異なり、カニューレ先端側からネックプレート側まで前後左右の膨らみは均一でなく、i)カフによる気管壁の圧排が軽度の場合もあれば、カフにより気管壁が樽状になる場合もあること、そしてj)カニューレ先端が気管内腔の中央に位置する場合もそうでない場合もあることが視覚化された。成果の一部については、第122回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会の手術手技セミナーで講演し（成人の外科的気道確保を巡る注意点.齋藤康一郎）、論文発表を行った（宮本真, 渡邉格, 中川秀樹, 齋藤康一郎.生体内に挿入した気管カニューレの超高精細CTによる臨床評価.喉頭 33:206-210, 2021. ）（図）。

現段階では、本研究の目指す産学連携に必要なシーズの創出は次の段階、という状況であるが、引き続き症例を重ねて検討を行っており、近日中に発表して論文化する準備を進めている。近い将来には、臨床現場への還元を目指した産学連携に発展させることができると考え、継続して本研究を推進したい。

本研究への助成に感謝申し上げます。



図（喉頭 33:206-210, 2021. より引用）
生体内に留置された気管カニューレならびに気管壁の3D構築画像

カニューレの前方（a）、側面（b）からの形状が精細に再構築されている。
気管壁とカフの位置関係やカフによって圧排されている気管壁の形状も可視化された（c）。
カフの形状は、4カ所の横断面でも前後左右の対称性がまちまちであることがわかる（d,e）。

地域における
社会貢献活動①

BLS指導を通した実践的な災害対応力の向上と共助精神の涵養

■実施日：2021年度未実施
■担当者：宮野　收
保健学部 救急救命学科 特任教授（副学科長）
滝沢　文彦
保健学部 救急救命学科 特任准教授

目的

杏林CCRC事業の目標として掲げた「災害に備えるまちづくり」をテーマとした社会貢献活動として、三鷹市民等の防災行動力向上のために、救急救命学科の学生が主体となった活動を行う。

実施内容

1　救急救命学科では、4学年全ての学生が「応急手当普及員」の資格を取得し、シミュレーションの授業を通して実践的に指導技能の向上を図っている。
2　具体的活動
①三鷹市総合防災訓練及び三鷹市内の各地区の防災訓練に参加してのＢＬＳ指導
②三鷹市の市民駅伝大会での救護活動
③三鷹消防署と連携した市民等に対する救命講習の実施
④社会的弱者である高齢者の救命を推進し共助の精神を養成するため「社会福祉法人 弘済園まつり」を活用したＢＬＳ指導の実施
⑤その他（羽村市中学校に対するＢＬＳ指導の実施）

活動結果

【「地域活性化」「地域課題解決」などへ寄与した点を含めた活動の成果や達成状況】

市民の方からは学生の丁寧な対応に対して感謝の言葉を頂いている。市民の防災力向上のために、地域密着型の社会貢献活動が展開されている。

【学生が参加した場合は、教育的効果など】

これらの取り組みにより、学生が社会貢献への意識向上が図られ、また、実践的な指導を行うことで救急救命士の資格を活かした職業に就いた際に求められる救命技能の向上に結び付くものと考えられる。さらに、様々な年齢層の市民と接することでコミュニケーション力の向上が期待できる。

【活動ができなかった理由等】

1　新型コロナウイルス感染症の感染拡大継続に伴い、2021年度は三鷹市の総合防災訓練、市民駅伝大会が中止となった（２年連続）。
2　上記の理由により、三鷹消防署及び弘済園でのBLS指導も中止された。
3　羽村市中学校に対するBLS指導については、下図に示す内容で直前まで準備を進めていたが、先方の都合により中止となった。

●密を極力避け、限られた時間でBLS講習を実施

テニスボールを応用活用

電子学習室（インターネット）を活用

地域における
社会貢献活動②

三鷹市における健幸教室および体力測定会の開催

■実施日：2021年12月4日
■担当者：榎本　雪絵
保健学部 理学療法学科 准教授

目的

この事業は、三鷹市在住高齢者の健康寿命の延伸を目的に、2016年から2019年まで継続して年4回（7月、10月、12月、2月）、理学療法学科学生のボランティアと自主グループ体笑会の協力のもと実施してきた。昨年度はCOVID-19感染予防のため、学生ボランティアは除いて、12月にのみ開催した。

実施内容

今年度も7月、10月、2月の開催は感染予防の点から中止とし、緊急事態措置やまん延防止等重点措置などの期間ではない2021年12月4日のみ開催した。会場である井の頭キャンパス実習室の収容可能人数を事前に確認し、募集人数は20名に制限した。対象は三鷹市在住で、屋外歩行が自立し、日常生活や運動の実践に制約のない60歳以上の方とし、「広報みたか」掲示板にて公募した。

教室の開催においてはCOVID-19感染予防に配慮した。参加受付時から、ソーシャルディスタンスの確保と飛沫対策を行い、消毒済みのボールペン付ホルダーにまとめた資料と名札を配布した。また、参加者にはマスクの着用と手指消毒の徹底をお願いした。

受付終了後、運動の実施が可能か確認するため、体調チェック票を用いた問診と、体温・血圧・脈拍測定を、杏林大学保健学部の岡本博照医師と陵北病院の田邊看護師にご指導・ご協力いただきながら、学生が実施した。参加者20名の内、体力測定および運動の実践が困難と思われる参加者はいなかった。

この教室では、運動前後の体力測定（握力とファンクショナルリーチテスト）と、休憩含む約90分のストレッチを中心とした運動の実践、また、教室終了時にこの教室の参加満足度と外出頻度や運動習慣などの日常生活に関するアンケート調査、質問票（SF-8）を用いての健康関連QOLの評価を行った。

運動の実践の前に、パワーポイントを利用し、運動実践する上での留意点について説明した。

運動の内容としては、スタティックストレッチとダイナミックストレッチを組み合わせたプログラムで、特にストレッチする筋を意識して行うよう指導した。体力測定および運動実施においてもソーシャルディスタンスの確保に努めた。また、2019年度までは呼吸を止めないように、声を出してカウントしながら運動していたが、マスクを装着し、参加者は声を出さずに運動した。

活動結果

教室終了時のアンケート調査においては20名の方から回答を得た。参加者の年齢は、60-65歳が1名、66-70歳が4名、71-75歳が5名、76-80歳が4名、81-85歳が4名、85歳以上の方が2名だった。男性9名、女性11名で、2名を除き就労していなかった（無回答1名）。外出頻度は「毎日」の方が8名、「2-3日に1回程度」の方が9名、「週に1回程度」の方が1名（無回答2名）で、外出頻度は高いと思われた。運動頻度は「毎日」の方が7名、「2-3日に1回程度」の方が8名、「週1回程度」の方が3名、「運動はしていない」の方が1名（無回答1名）で、運動習慣が高いと思われた。

この教室の参加満足度については「とても満足」が9名、「まあまあ満足」が5名（無回答が5名）で、満足度は高いと思われた。この教室に参加する経緯としては「市報を見て」が10名、「友人」の誘いが3名、その他が5名であった。この教室への参加回数は「初めて」の方が4名、「2回目」の方が2名、「3回目」の方が1名、「4回以上」の方が10名（無回答1名）で、繰り返し参加頂いている方が半数を占めていた。他の地域活動への参加状況は、「参加していない」が5名、「以前参加していた」が3名、「参加している」が12名で地域活動に積極的と思われた。

SF-8を用いた健康関連QOLについては、身体機能（Physical functioning：PF）、日常役割機能（身体）（Role physical：RP）体の痛み（Bodily pain：BP）、全体的健康感（General health：GH）、活力（Vitality：VT）、社会生活機能（Social functioning：SF）、日常役割機能（精神）（Role emotional：RE）、心の健康（Mental health：MH）の8項目について、年代別平均値と比較した。

60歳代の平均値はPF51.04、RP51.26、BP50.72、GH50.16、VT50.37、SF51.51、RE51.59、MH51.92であり、60歳代の参加者5名の平均値はPF51.25、RP52.05、BP54.72、GH52.70、VT53.90、SF50.85、RE51.45、MH52.18であった。SFとREを除き、60歳代参加者の健康関連QOLは高い値を示した。

70歳代の平均値はPF49.02、RP48.87、BP48.23、GH50.15、VT50.65、SF50.66、RE50.68、MH51.57であり、70歳代の参加者9名の平均値はPF52.14、RP51.58、BP47.28、GH54.03、VT52.81、SF50.50、RE49.95、MH50.31であった。BPとSF、RE、MHを除き、70歳代参加者の健康関連QOLは高い値を示した。

80歳代の平均値はPF47.64、RP47.33、BP46.46、GH49.14、VT49.03、SF49.05、RE48.42、MH50.22であり、80歳代の参加者6名の平均値はPF48.56、RP48.76、BP49.44、GH50.66、VT51.86、SF48.93、RE47.34、MH48.87であった。SF、RE、MHを除き、80歳代参加者の健康関連QOLは高い値を示した。これらの結果では、参加者は他者との交流が妨げられた、身体機能面ではなく心理的な要因で普段の生活に支障があると回答している傾向が示された。

未だコロナ禍の中にあり、これまで通りの生活と比較して、なんらかの制限・制約がある状況において、教室では感染予防を考慮しながら、参加者間また参加者と学生間などの社会交流を促進する必要があると思われた。

2019年度までの活動では、参加者と学生ボランティア間および参加者間の社会交流の促進をも目的に実践し、好評を得てきた。昨年度は感染予防のため、学生ボランティアとの交流の機会を得なかったが、今年度は11名に制限し参加した。学生ボランティアは理学療法学科3年生9名、4年生2名で、マスクとグローブを着用し、感染対策に配慮しながら、バイタル測定や体力測定、運動の実践時には姿勢の確認やフォームの指導など運動指導を直接行った。

ボランティアとして参加した3年生からは、「参加者様から感謝されてとてもうれしい」や「臨床実習前に高齢者に関われる貴重な機会だった」との発言が得られた。また、将来的に健康増進や介護予防事業などに携わりたいと思っている学生もおり、将来像を考える機会になったと思われた。

バイタル測定の様子

運動実践の様子

感染対策に配慮しながら学生が直接指導①

感染対策に配慮しながら学生が直接指導②

地域における
社会貢献活動③

「生涯スポーツの機会提供」プログラム

■実施日：2021年4月1日〜2022年3月1日
■担当者：相原　圭太　保健学部 理学療法学科 助教
石井　博之　保健学部 理学療法学科 教授
楠田　美奈　保健学部 看護学科 学内講師

目的

本プログラムは主に中高齢者を対象に、体力や運動能力の評価を行い、個々人の身体機能や生活状況に応じた運動に関する提案を行う。その中で運動の多様性を提供するとともに定期的に評価を実施し運動の効果を確認する。そして、自らの身体に興味をもち日常生活の中で無理なく運動を継続することで健康寿命延伸を図るための支援を目的としている。

2014年6月から開始した本プログラムも今年度で8年が経過するが、今年度は昨年度同様、COVID-19の影響に鑑み規模を縮小し実施した。本稿では、これまでの活動概要に加えてCOVID-19対策を講じて実施した今年度の状況報告および今後の展望について述べる。

実施内容

1）概要

本プログラムは運動を日常生活で無理せずに継続することで健康寿命延伸をはかるための支援を目的としている。プログラムは文部科学省作成の新体力実施要項に基づいた運動機能の評価及び、地域在住中高齢者の生活環境・嗜好・健康状態を聴取することで、個々人の状態に応じたオーダーメイドの運動指導を行なっている。

これらのプログラムは羽村市福祉健康部健康課、および羽村市教育委員会生涯学習部スポーツ推進課と協同で実施している。

2）2021年度の取り組み

2021年度はCOVID-19の影響により「健康フェア」が中止となったが、体力測定および運動に関する相談会は合計4回実施することができた。実施に際し、事前の検温や体調確認シートで問題がないと判断された参加者はマスク着用(教員・スタッフはマスクに加えてフェイスシールドの着用)を必須とすることや、いわゆる「3密」回避のため定期的な換気の実施や測定・面談対応の個別化と身体的距離の確保、測定・面談実施後の手指・物品の消毒、接触や飛沫が生じる可能性の高い測定項目を非実施にするなどの感染対策を徹底した。

今年度は約70名の羽村市民の方々にご参加いただいた(表1)。COVID-19の流行から2年が経過し感染対策をしながら少しずつ運動を再開できている者もいたが、平常時と比較すると運動や活動量は十分に回復できていないという声が多く聞かれた。高齢者を中心に依然として筋肉量や歩行能力、認知機能の低下といった健康二次被害に対する不安を抱える市民は多く存在している。また、それらに加えリモートワークになったことで運動不足に悩む働き盛り世代や子育て世代の相談も増加傾向にあり、さまざまな世代のニーズに応じた対応が求められている。

今後の展開

本プログラムの開始から8年が経過し、我々の活動が地域の中で着実に浸透し体力・運動機能の再評価に訪れるものも多くなっている。依然としてCOVID-19を取り巻く情勢は先行き不透明であるが、我々の活動がさまざまな健康二次被害の予防において重要な役割を担っていることを改めて強く認識するとともに、このような状況下であっても無理なく日常生活の中で運動を継続できるよう支援し、今後も市民の健康の保持・増進に寄与したい。また、次年度は引き続き社会情勢等を注視し十分な感染対策を講じる必要はあるが、徐々に従来通りの定員、測定項目へと戻すことを視野に入れており、学生ボランティアの積極的な参加を促し、プログラムの更なる活性化を図りたい。

月日	参加者	教員	学生	活動実施場所	備考
6 /12	20人	3人	0人	羽村市 スポーツセンター	体力測定会 運動相談会
8 /21	19人	3人	3人	羽村市 スポーツセンター	体力測定会 運動相談会
12/12	中止			生涯学習センター ゆとろぎ	はむら 健康フェア
12/18	17人	3人	5人	羽村市 スポーツセンター	体力測定会 運動相談会
2 /12	9人	3人	0人	羽村市 スポーツセンター	体力測定会 運動相談会

表1 2021年度 活動実績

体力測定の様子

個別相談の様子

地域における
社会貢献活動④

多胎育児支援活動 〜ツインズマーケット〜

■実施日：2022年3月6日
■担当者：場家美沙紀　保健学部 看護学科 学内講師
佐々木裕子　保健学部 看護学科 教授
鈴木　朋子　保健学部 看護学科 学内講師
長谷川和子　保健学部 看護学科 学内講師
山内　亮子　保健学部 看護学科 学内講師

目的

多胎育児中の保護者は、同時に複数の子どもを育てる中で多様な困難感を抱えている。睡眠不足や疲労、育児期の外出困難な状況により育児情報の入手も困難であることなどから、孤立感や育児不安感を有しており、多胎児の親が安心して育児期を過ごせるような環境や情報を提供していくことが望まれている。以上のことから、本活動は、ふたご・みつごを育てている家族が多胎育児に関する情報を得ること、多胎家庭特有の不安や問題を解決する機会を得ること、並びに親同士の交流の場を提供することを目的とした。

実施内容

I.　対象者：多胎育児を行っているご家族
II.　開催日：2022年3月6日(日)　13:00〜16:00
III.　方法：今年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響を鑑み、オンライン開催とした。
IV.　プログラム：
13:00〜13:10　開会の挨拶・オリエンテーション
13:10〜14:25　第1部　講演会(質疑応答含む)
「ふたごからふたごのお母さん・お父さんへ」
(金沢大学副学長　志村恵先生)
14:40〜16:00　第2部　情報交換(フリートーク)・まとめ
16:00　閉会

活動結果

I. 参加者

1. 講演会

多胎妊娠中及び多胎育児中のご家族51組の申し込みがあり、リアルタイム配信に36組のご家族が参加された。講演内容は、オンデマンド配信も併用し、終了後希望者が視聴できるようにした。なお、参加者のお子様の年齢は0〜19歳であり、多摩地域だけでなく、東京23区内、東京都以外からの参加もあった。リアルタイム配信に参加された方の約半数は、ツインズマーケット初参加であった。

2. 情報交換(フリートーク)参加者

多胎育児中のご家族12組14名(パパ2名、ママ12名)が参加された。

3. その他の参加者

杏林大学教員5名、多摩多胎ネット2名(教員除く)、講演会講師1名、杏林大学学生1名

II. 講演会「ふたごからふたごのお母さん・お父さんへ」

双子当事者(一卵性双生児)である志村恵先生を招いて講演会を行った。講師自身が育つ中で経験された「ふたごの気持ち」についてお話があり、子育てに苦労している多胎児のご家族に向けた応援メッセージをいただいた。

III. 情報交換会

事前申込者を対象とし、3つのグループ(パパ1グループ、ママ2グループ)に分かれて情報交換(フリートーク)を行った。離乳食やお風呂の入れ方、自分の時間の作り方、きょうだいとの関係、ふたごサークル、リモートワーク中の育児等、様々な内容について情報交換が行われた。

IV. 全体を通して

昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染拡大の影響を鑑みオンライン開催となった。講演会は、多胎児当事者ならではの経験に基づいた思いを聴くことができる貴重な機会となり、参加者から好評であった。また、講演会は参加申込者限定で希望者にオンデマンド配信を行ったところ、通信環境の問題や子どもの世話等で講演途中を聞き漏らした方、リアルタイム参加ができなかった方などから問い合わせがあり、オンライン開催のメリットとして需要があった。

昨年度は講演会のみの開催であり、「親同士の交流の場を提供する」という目的達成について課題となっていた。そこで、今年度は講演会に加え、情報交換(フリートーク)の時間を設けた。異なる年齢のお子様を育児中のママ・パパ同士で情報交換を行うことで、多胎育児中の悩みを共有し、先輩ママ・パパからのアドバイスを得る機会となった。

全体を通してオンライン開催は、自宅で家事や育児の合間に気軽に参加できること、遠方からも参加できることなどから好評であった。その一方で、オンラインでの情報交換会は、「発言のタイミングが難しい」、「発言者以外がミュートにしていると相槌などが聞こえず不安になる」、「対面開催時のように託児がないため参加のハードルが高い」などの感想もあり、対面開催時のように子どもを学生ボランティアに預けて、子どもと離れてゆっくりと会に参加することができないこと、発言のタイミングに難しさがあることなどのオンライン上

で情報交換会を行うことの難しさも示唆された。さらに、平日開催やハイブリッド型での開催を望む声もあり、今後の開催方法について検討していく必要性が示された。

【まとめ】

今後もオンライン・対面各々のメリットを活かしながら、多胎家庭同士のつながりを深め育児の孤立を防ぐことができるよう多胎育児に関する情報発信、親同士の交流の場の提供等、多胎育児支援活動を継続していく必要がある。

地域における
社会貢献活動⑤

性の多様性に対応したシナリオによる「いのちのおはなし会」の実践

■実施日：2021年9月1日〜2022年3月31日
■担当者：佐々木裕子　保健学部 看護学科 教授

目的

私たちは、大学を基盤とした地域貢献活動の一環として保育園を訪問し、幼児とその保護者を対象とした「いのちのおはなし会」（以下、おはなし会）に継続的に取り組んでいる。活動の目的は、子どもたちが①いのちはかけがえのない大切なものであること、②自分の体を知り、プライベートゾーンを守ることができること、また③保護者や保育士が子ども達の性の疑問に向き合うことができる、の3点である。この取り組みは15年程前から継続的に実践されており、保護者や保育園からのニーズは高い。

一方で、近年の性の多様性に理解を示す社会の動きや研究知見から、「男女という二つの性だけで話しを終わらせてよいのか」「LGBTなど、多様な性の理解に向けて触れる必要はないのか」との意見が聞かれたことから、従来のプログラムに加えて、子ども達が自分の性を認識し始める4・5歳の時期に、男女の性に捉われない多様な性の理解につながるおはなし会のシナリオを学生と検討することとなった。今年度は感染対策の下、新しいシナリオを用いていのちのおはなし会を行い、子ども達の反応、保護者の反応、保育園側からの反応、学生自身の振り返りによりその効果を検討することとした。

実施内容

保育園や児童養護施設の子ども、保護者を対象に目的に沿った内容で「いのちのおはなし会」を学生主体で実施する。当活動を行うことによる到達目標は以下のとおり。

1. おはなし会に参加した子ども達がいのちの大切さを知り自分やまわりの友達を大切にできる。
2. 子ども達が男女のからだの違い、こころの性、からだの性の多様性を理解する。
3. プライベートゾーンの意味を理解し、自分や友達を大切にした行動がわかる。
4. 保護者が幼児期からの性教育の必要性を理解し、日常生活においてこどもからの身体や性に関する質問に向き合う姿勢が理解できる。
5. 保育園で子ども達に関わる大人達（保育士等職員）が、子どもからのからだや性に関する質問に向き合い、教育的な対応について理解できる。
6. おはなし会に参加した学生が幼児の発達を理解し、自身のセクシュアリティを高めることができる。

活動結果

2020年度はCOVID-19の感染拡大が終息せず、緊急事態宣言の発出等により、活動の制限が強いられたことから、おはなし会の実施にいたらなかった。2021年度は感染対策を施しながら、1園で開催予定であったが、保育園側の事情により中止の申し出があり実施に至ることができなかった。そのため、4名の学生によるおはなし会の動画を撮影し、保育園に送ることにした。後日、保育園で年長クラスと年中クラスの子ども達を対象に視聴会が行われ、「赤ちゃんの誕生についてはきょうだいがいる子は特に共感している様子」「ハートの形をした心の違いについては興味を持って聞いていた」「プライベートゾーンについても再確認することが出来た」との感想が届いた。

次年度も開催方法を検討しながら、新しいシナリオによる活動を行っていきたい。

地域における
社会貢献活動⑥

鎌倉浄智寺写真供養感謝祭の企画

■実施日：2021年11月13日
■担当者：宇佐美　貴浩　外国語学部
観光交流文化学科 教授

目的

2021年11月13日、北鎌倉浄智寺にて写真供養感謝祭を開催した。

写真供養感謝祭とは、ひとりひとりの人生を語る思い出深き写真に感謝の気持ちを込め、供養することによって、新しい人生へと歩みだす手助けをする取り組みである。鎌倉瑞泉寺で17年間続いてきたこの感謝祭は、2014年より北鎌倉浄智寺に場所を移し、新たに開催した。毎年11月第2土曜日に開催し、将来的には鎌倉の観光イベントとして定着させ、地域活性化を促進することを目的とする。

また、当該活動を通して、地域振興に関するプロジェクトがどのような過程を経て実現するかを体験するとともに、地域の人と文化と産業が共生していくことの大切さを学ぶ。

実施内容

当該イベントにおける宇佐美ゼミナールの活動としては、現地自治体との調整、SNSによる広報活動など、当該イベントの企画全般を実施した。

現地自治体とは、当該イベント開催場所である鎌倉浄智寺とのスケジュール調整や必要備品の手配などを行い、広報活動として、SNSなどの媒体により、動画や写真を使用して当該活動の宣伝を実施した。なお、広報宣伝活動に関しては、コロナウイルス感染拡大にともない、本学学生による鎌倉近隣地区へのポスターの配布や、地域事業者への当該イベントのPRの協力依頼を自粛し、神奈川県在住の写真供養感謝祭実行委員により例年より規模を大幅に縮小して実施した。

イベント当日においては、参加者の受付や案内を含め、高齢者の参加が多いことから、安全を第一に考えた危機管理的な対応やサポートを実施し、円滑なイベント運営に寄与した。また、参加者に対して鎌倉の観光ツールの一つである浄智寺の境内を案内し、鎌倉観光のPRにも貢献した。また、当日の運営に際しても、コロナウイルス感染予防のため、受付における検温、手指消毒、および当該イベント参加者の中に感染者が出た場合に連絡できるよう電話番号を記載してもらうなど、徹底した感染予防対策を行い、実行委員の参加を制限し、規模を縮小して実施した。

また、本年度の活動においては、写真供養感謝祭開催の状況をYouTubeにてライブ配信し、当該イベントをより多くの方々に知っていただくための新たな試みを実施した。

活動結果

●「地域活性化」「地域課題解決」へ寄与した点を含めた活動の成果

当日は、広報宣伝活動を大幅に自粛したにもかかわらず、多くの方々が当該イベントにご参加いただき、浄智寺の自然あふれる境内の中で写真のお焚き上げを体験し、こころ豊かな時間を共有することができた。また、参加者の方々に対し、鎌倉五山のひとつである浄智寺の境内をご案内し、地域の貴重な観光ツールであることを認識していただき、当該イベントが地域活性化を促す取り組みであることをご理解いただいた。

●参加学生の教育的効果

当該活動を通して、地域振興に関するプロジェクトを成功させるための知識と技術を身に着けることができた。また、地域活性化には、地域の人と文化と産業が密接につながり、協力し合うことが必要であることを学んだ。さらに、普段のキャンパスとは違う現場での学びや地域自治体・企業、および地域の人々との交流は、参加した本学学生には貴重な体験となった。

●今後の活動

本年度は試験的にYouTubeによるライブ配信を実施することができたため、将来的には、実際に当該イベントの現場に参加できない方々にも、事前に供養する写真を送っていただくことによって、本人の代わりに写真供養感謝祭実行委員のスタッフがお焚き上げを実施する模様を見ていただくことなども検討し、様々な形で当該イベントに参加していただけるようその方法を検討する予定である。

地域における
社会貢献活動⑦

子どもの発達や子育ての不安を抱えた保護者への心理的支援
（オンライン子育て相談会の開催）

■実施日：2021年10月29日・30日・他
■担当者：五嶋　亜子　保健学部 臨床心理学科 講師
　　櫻井　未央　保健学部 臨床心理学科 講師

目的

○コロナ禍が長引き、子育ての孤立化・虐待の潜在化が懸念される中、子育て中の保護者が一人で悩みを抱える状況を回避するために、オンラインによる個別の子育て相談会を行った。
○どこに相談したらいいかわからない、わざわざ専門機関に相談に行くほどではないが困っている、コロナ禍で相談に行きづらいが専門家の意見を聞いてみたい等、気軽に相談できることを目的とし、相談につながるはじめの一歩となることを趣旨とした。

実施内容

【対象】
○2歳～就学前のお子さんを子育て中の保護者（三鷹市および近隣に在住の保護者）

【活動の概要】
○オンライン子育て相談会のチラシを作成し、三鷹市内の保育園・幼稚園・小児科・子育て支援関連施設等に郵送にて配布した。
○相談申込はメールで受け付け、参加者それぞれの相談日時の予約を決定した。
○オンライン相談は、Zoomまたは電話のどちらか希望されるほうで行った。
○2021年10月29日・30日の二日間で開催した。ただし、相談申込数が予定枠を超えたため、別日で個別に相談対応をした。

【実施内容】
○19件の申込があった。予約枠が埋まり、締め切り後に申込があった場合は、別日で対応可能な日時で個別に相談をお受けした。
19件の内、すべて母親からの申込であり、内3件は両親での参加であった。
○参加者全員が、オンラインなので参加しやすかったと感想を述べているように、コロナ禍であり、かつ、乳児を育児中で外出しづらい方や、仕事で多忙な方でも参加できた。
○相談の対象となる子どもは30名で、男子20名・女子10名だった。
○子どもの年齢の内訳は、0歳2名・1歳3名・2歳1名・3歳4名・4歳8名・5歳6名・6歳5名・7歳1名であった。保育園・幼稚園に通園している3～6歳児についての相談が主であり、0～2歳および7歳はそのきょうだいである。
○相談内容は、子どもへの対応をどうしたらいいのかわからない、という主訴が約6割であった。対応に悩む子どもの様相とは、癇癪がひどい、過敏な性質、切り替えが苦手、引っ込み思案や強気な性格傾向、おねしょ、指しゃぶり、きょうだいげんか、親に暴力的になる、などであった。
　次に、子どもを怒りすぎてしまい、よくないとわかっていてもやめられない、という主訴も目立った。その他、わが子の障害についての葛藤や不安・夫婦の問題・人とのつながりや子育ての支援が少ないことなども語られた。

活動結果

【参加者の声】
○相談終了後に、インターネット上でのアンケートを任意でお願いした。約65%の回答率で、以下のような感想が寄せられた。

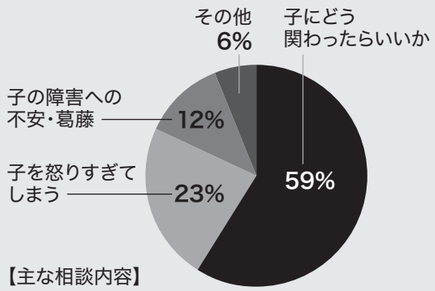
①相談してみての体験
・親身に話を聞いてもらえた感じがあった
・的確で具体的なアドバイスがもらえた
・よくわかってもらえた感覚があった
・話しやすくて安心した
・いろいろな角度からコメントがもらえた
・自由な雰囲気で話せた
・話を聞いてもらい、すっきりした/頭の整理ができた/心に余裕ができた/心が軽くなった/安心した/不安な気もちがほぐれた/肩の荷がおりて軽くなった
・子どもへの対応が柔らかくなった
・夫に伝え、話し合うことができた
・相談で話に出たことを試してみたいと思った
・病院にいくほどではないが専門家に相談したかったのでこういう機会があってよかった　など

②支援についてのニーズ
・今回のようにカウンセラーに気軽に相談できる場
・定期的に話ができて、アドバイスがもらえる場
・子育てで判断に迷うときに相談できる場
・ほかの親子とつながったり、共有できる場　など

【考察】
　申込数が多く、オンラインで気軽に専門家に相談できる場へのニーズがあることがうかがえた。明確な問題がないとなかなか相談機関には足を運ばないが、子育てをしながら日常的に不安や困惑を抱えている保護者は多く、そうした層が利用できる相談の場は求められている。
　子育ての悩みは、子どもの育てにくい特性や子育てのサポートの少なさなどで苦労している面もあるが、相談者の多くが、「自分はほかのお母さんたちのように上手に子育てができていないのでは」という不安や、「自分はだめな母親なのではないか」という自責感・罪悪感を抱えている心理的傾向がみられた。それが親子の愛着関係に影響し、ますます子育てがしんどくなっている悪循環もうかがえた。また、「どうしたらいいのか判断基準がわからない」という悩みも少なからずあった。現代は情報は過多だが、リアルな人とのつながりは希薄である故か、外的判断基準を求めるものの、それで安定した子育てにはなかなかつながらず、さらに自責感・罪悪感をつのらせていく状況があることも推測された。
　今回の参加者の多くからは、「また同じような会があれば参加したい」とのお声をいただいた。
それらのニーズに応えられるよう、だれかにつながり、受け止められる体験を通して、不要な自責感や罪悪感を手放し、親も子も安心感を増やせるような心理的支援について、より検討し、今後も活動していきたい。

相談会の案内チラシ

【参加者】
①申込件数：19件
（すべて母親から申込/3件は両親での参加）
②子ども内訳：計30名
（男子20名・女子10名）



【主な相談内容】

地域における
社会貢献活動⑧

コロナ禍における介護予防事業の展開

■実施日：2021年5月6日～2022年3月18日
■担当者：門馬　博　　保健学部 理学療法学科 講師
　　竹田　紘崇　医学部付属病院リハビリテーション室
　　技師長補佐

目的

2020年より続くコロナ禍においては「密集・密接・密閉」を予防することが感染拡大予防に重要であり、会場に集まっての介護予防事業の実施が困難となった。また高齢者の外出頻度がコロナ禍において減少していることが報告されており、在宅時間の長期化による身体機能低下（コロナ禍における健康二次被害）、そして要介護状態へのリスク増大が懸念されている。

そこで本活動では、「高齢者が自宅で実施できる体操用資料の作成」「コロナ禍における感染予防に配慮した介護予防事業の実施」という2つの活動を通じてコロナ禍の介護予防事業のあり方を検討・実施することとした。

実施内容

○高齢者向け介護予防体操資料の作成
○三鷹市井の頭地区における介護予防事業への協力
　（うごこっとチャレンジトレーニング井の頭）
※上記事業は8月6日（金）～9月24日（金）、11月5日（金）～12月24日（金）、1月21日（金）～3月18日（金）の期間で週1回、3クール（計24回）で実施した。
※対象者は三鷹市内居住の高齢者（3クールで延べ24名）。
※上記事業への本学の参加者は門馬博（保健学部理学療法学科）のみ。

活動結果

我々は過去に三鷹市内において実施した介護予防事業を通じて『この運動にはどのような効果があるのか？』『この運動はどこに効いているのか？』といった質問を多く受けた。運動のポイント、どの部分に対する運動であるかを納得した上で運動したいという高齢者のニーズに応えるためには、国内各地で行われている「ご当地体操」とは異なる視点のアプローチも必要であると考え、音楽に合わせた体操ではなく「高齢者が自身で考え、自分にあった運動を選択して実施できる運動の提供」をコンセプトとして、「うごこっと体操」を三鷹市リハビリテーション協議会と協力し作成した。

図1：うごこっと体操　パンフレット
本事業ではプロトタイプ版を作成し、井の頭地区の事業で使用。データは三鷹市高齢者支援課へ提供し、市内各所での事業にも利用を拡げるために三鷹市社会福祉協議会が別途パンフレットを作成（なお、社協版のパンフレット作成は本助成金ではなく三鷹市の予算執行による）。

実際の介護予防事業においては会場入口での手指消毒、人数の制限（10名以内）、会場内の消毒、体調確認の徹底などを行い、全期間を通じて安全に事業を継続することができた。また今後に向けてオンラインでの参加や、VR技術を用いて自宅にいながら現地参加しているような仕掛けづくりを検討するために360°カメラを使用した動画の作成も試行した。高齢者への応用には大きな課題があるものの、これらの技術開発、応用については引き続き検討を続けていきたいと考えている。

図2：コロナ禍以前の介護予防事業（左）と今年度の事業（右）
コロナ禍以前は20名以上が集まっていたが、今年度は10名以内で実施。講師の体操指導だけでなく、自分たちが普段心がけていること、自宅で実施している運動を互いに情報提供するという時間も設けながら実施した。

図3：VR技術を用いた
　　動画の作成（試行）
360°カメラを用いて撮影した事業の様子。在宅高齢者の事業参加手段となる可能性も考えられる。

【学生が参加した場合は、教育的効果など】

当初予定では介護予防事業において学生がボランティアスタッフとして参加する予定であったが、新型コロナウイルス感染症予防の観点から今年度の事業への参加を見送ることとなった。

しかしながら今回試行したVR技術を用いた動画については、オンラインライブ接続とすることにより学生が現地に行かずとも同時に多くの学生が事業を見学することができるという教育的効果も今後期待できる。コロナ禍という特殊な状況下において得たスキルを今後の事業、教育へと汎化させていきたい。

地域における
社会貢献活動⑨

Mindful Community Project

■実施日：2021年5月17日～2022年3月8日
■担当者：岡村　裕　総合政策学部 教授

目的

マインドフルネスは、主として欧米を中心にその実践と研究が進められている「今ここへの気づき」を促すメンタルエクササイズの一種である。ストレス軽減による心の健康保持だけでなく、身体的健康の保持、集中力・学習能力の向上、人間関係の良好化などの効果に関する研究結果が数多く報告され、医療、教育、職場、スポーツなど、多様な場所での活用方法が提案されている。他方で、日本ではそれほど浸透してはおらず、マインドフルネスの意味するところ、その実践方法について多くの人々に知られているとは言い難い。今日の日本の状況、とりわけコロナ禍における活動制限が及ぼす人々へのメンタル面の諸問題への対処策が求められている状況下では、マインドフルネスの周知と活用が、この問題への対処策として様々な好結果をもたらすことが期待できる。特にコロナ禍においては、感染者への偏見が生じていることなどが報告され、近隣での人間関係上の問題も深刻化しているとされるが、マインドフルネスの効果としては、そのような偏見の軽減にも効果があることが報告されている。

そこで、本プロジェクトでは、同じ地域に暮らす多くの人々が、お互いを思いやり、よりよい生活を送ることができるように「マインドフルネス」を正しく理解し、活用できるための様々な企画を発案・実施することを目的とした。

実施内容

地域の人々にマインドフルネスに関する正しい知識と実践方法を様々な手段で周知した。マインドフルネスは、日常生活において普通に行われている様々な活動を行いつつ、その中で普段意識しないことを意識する「気づく心のエクササイズ」である。したがって、その実践方法は多様であるが、活動時にマインドフルネスの説明をしつつ、その理論や方法の理解を深めながら行うことが重要となる。前半はコロナ対策としてオンライン講座を中心に行い、状況に応じて対面での開催を進めた。なお、本プロジェクトの企画・立案・実行においては、その活動員として本学学生の参加を募り、地域貢献とともに学生の社会的スキル向上に資する活動となるように配慮した。

1. 地域住民対象オンラインワークショップ
●「音楽を使ったマインドフルネス」
　7/23 (21:00～21:45)　(参加人数60名)
●「折り紙を使ったマインドフルネス」
　7/24(21:00～21:45)　(参加人数30名)
●「謎解きを通じたマインドフルネス」
　9/24(21:00～21:45)　(参加人数30名)
2. 学内講座「マインドフルネスとは」
●医学部「人文生命科学特論」
　4/7 (対面)　(対象人数121名)
●総合政策学部「ゼミ連企画報告会」
　10/18-22(動画配信)　(対象人数40名)
●総合政策学部「オープンゼミ」
　11/4(対面)　(対象人数40名)
●総合政策学部・外国語学部「健康社会学」
　11/9 (動画配信)　(対象人数226名)
●保健学部「職業適性論」
　12/3 (動画配信)　(対象人数261名)
●総合政策学部「プレゼミナール」
　1/12 (対面)　(対象人数29名)
3. 対面型ワークショップ
●英語キャンプ(AP:高校生対象)
　「Mindfulness Activities」8/17,18 (参加人数8名)
●関東国際高校(出張講座)「マインドフルネスとは」
　12/14 (参加人数35名)
●おむすびハウス「お部屋でサロン：マインドフルネスとは」
　3/8 (参加人数25名)
4. 研究発表
●大学コンソーシアム八王子 学生発表会
　「Mindful Community Project」12/4 (対面)
●三鷹ネットワーク大学 学生によるミタカ・ミライ
　研究アワード2021　「Mindful Walking in Mitaka
　– 歩いてミタカ-」12/18 (対面)
5. その他の活動
●「マインドフルネス実践ハンドブック」の作成と配布 (3月)

活動結果

コロナ禍という状況にありながらも、オンライン、オンデマンド、対面形式を併用することで、年間を通じてある程度の回数のワークショップを開催することはできた。活動を通じて、その説明方法に関するさらなる工夫の必要性が明らかになった。引き続き、より効果的な周知方法のあり方について考えていきたい。

地域における
社会貢献活動⑩

「多摩地域マイクロツーリズムプロジェクト」への参加

■実施日：2021年10月1日～2022年3月2日
■担当者：志村　良浩　外国語学部
観光交流文化学科 教授

目的

コロナ禍の長期化により観光・宿泊業はじめ地域経済が大きな影響を受けていることを踏まえ、2021年春に「多摩地域マイクロツーリズムプロジェクト」（実行委員会：多摩市・稲城市・多摩大学総合研究所・京王観光株式会社、後援：観光庁、東京都、公益財団法人東京観光財団、東京都商工会連合会多摩観光推進協議会）が立ち上げられた。これは「令和3年度多摩・島しょ広域連携活動助成事業」と位置付けられている。このプロジェクトは実用可能なマイクロツーリズムプランの構築から「地元の魅力を再発見する」など継続性のある地域活性化を目指した官民学連携で実施する都内初の試みである。このプロジェクトにゼミナールでの地域活動として参画し、「多摩地域マイクロツーリズムコンテスト（タマリズム）」（プロジェクト対象地域：コンテストプランの対象自治体である多摩市・稲城市）への応募を契機に「郊外都市型」の観光まちづくりの企画立案、実証実験を経て次年度以降の実現を目指す。

実施内容

【活動対象者・人数】
外国語学部　志村ゼミナール3年生　8名
【活動の実施内容】
①プロジェクト参加のエントリー（2021年5月）
②第1回企画書の提出（同年6月）
③第1回企画内容発表、協働連携関係者
（自治体・観光協会・企業）との交流会参加（同年8月）
④タマリズム活動支援金審査会への参加（同年9月）
（※2021年10月以降、本学の地域活動助成費を活用した活動を開始）
⑤実証実験（フィールドワーク）
（2021年10月～2022年1月）
⑥最終企画書の提出（2022年1月）
⑦公開報告会・ドラフト会議への参加（同年2月）
⑧企画実現に向けた企業との打ち合わせの実施
（同年3月）

活動結果

【活動の成果や達成状況】
1.　プロジェクトの立案から準備に至るゼミナール活動は2021年4月以降、毎週のゼミナールの前後をはじめとする授業時間外だけでなく、夏季休暇中も週に1度のペースでオンライン形式での打ち合わせを定期的に継続実施して準備にあたった。

2.　多摩市・稲城市内のフィールド調査については、秋学期の調査期間中、調査日数：延べ19日間、調査人員：延べ47人の体制で展開した。また、取材店舗数は15店、協力許諾店舗数は8店であった。

3.　モデルコースおよびコンテンツの有効性を実証するためのモニター実験は外部モニターを募り、2022年1月8日～16日の間に延べ16人で実施した。

4.　モニター実験結果も踏まえ、タマリズム報告会（2022年2月）では最終プランとして以下を提案した。
①テーマ：
「笑顔をここから～多摩地域フォトスタンプラリー～」
②内容：一般市民（主にファミリー層を想定）の参加を募り、事前に指定されたルート上のスポットを来訪・利用してもらう。参加者には各スポットにて撮影した写真をインスタグラムに掲載してもらい、その写真を運営者側がインスタグラム上で確認することにより「フォトスタンプラリー」企画への参加となる。また、フォトコンテスト実施により、優秀投稿者に飲食店のサービス特典を付与することで次回以降の参加を促し、企画の持続性・継続性を図る。
③コンセプト：公共交通機関の利用促進、健康増進効果、地元飲食店の増収、神社仏閣の認知度向上
④モデルルート：
（春）多摩エリア：京王聖蹟桜ケ丘駅⇒都営桜ケ丘公園で花見⇒近隣飲食店で食事
（秋）稲城エリア：京王稲城駅・JR長沼駅⇒梨園で梨狩り⇒近隣飲食店で食事

5.　2月の全体発表会にオンライン参加した。当日発表した19チームの中では、表彰チーム（4チーム）には選出されなかったものの、同時に今後の企画実現に向けて企業・団体から協働のオファーを受けるドラフト会議が行われ、志村ゼミの発表プランに対して1団体・1社からオファーを得た。（オファー獲得は最終報告会参加19チーム中、12チームのみ）

6.　3月にオファー企業とのオンラインでの打ち合わせを行い、次年度の実用化に向けた態勢を踏まえながら今後の協働と取り組みの継続を確認した。

7.　「地域活性化」「地域課題解決」などへ寄与と達成状況について
「郊外都市型の観光まちづくり」に焦点を当てた当該プロジェクトにて学生が企画したプランは、特にコロナ禍において多摩市・稲城市が抱える観光事業の低迷、移動者の伸び悩みや飲食店・小売店利用の減少、当該エリアの神社仏閣の認知度向上などの諸問題を継続性と実効性のある地域活性化策として提案したものである。年度末時点で企業・事業者との協働によるプランの実現には至っていないものの、生活圏として両市に馴染みのない中でフィールド調査を行い、地元の観光スポットや飲食店などとの対話によって地域の活性化と経済効果創出を念頭に検討を重ねてきたことから、今後の実現による成果が期待できる。

【学生が参加した教育的効果】
当該プロジェクトの参加によって、①土地勘のない地域の観光スポット探索や魅力あるコンテンツ発掘によるリサーチ力の向上、②エリア周辺の各施設や飲食店舗などへのヒアリング・趣旨説明と協力要請による交渉力の向上、③企画立案に向けた行動計画の設定と工程管理による課題管理力の向上、④主体的・自律的に行動し他を巻き込むリーダーシップの醸成、⑤フィールドワークや進捗管理、企画立案をゼミ生一体となって行うことによるチームワークの醸成、などの教育的効果が確認できた。

フィールドワークの様子

2022年2月9日の報告会で使用したプレゼン資料の表紙

2021年8月　企画発表会・協働連携関係者との交流会の様子
（活動助成費の対象期間前）

2022年2月　活動報告会参加の様子（Zoom参加）

地域における
社会貢献活動⑪

市販集音器を活用した補聴効果体験

■実施日：2021年10月1日～2022年3月9日
■担当者：増田　正次　医学部 耳鼻咽喉科学 准教授
坂本龍太郎　医学部付属病院 耳鼻咽喉科 専攻医
濵之上泰裕　医学部 耳鼻咽喉科学 助教
木村　泰彰　医学部付属病院 耳鼻咽喉科 医員

目的

難聴は、コミュニケーション能力の低下をもたらすのみならず、認知症、うつ、フレイルの発症に関わるとされており、健康寿命に重大な障害をもたらす。世界保健機関も健康寿命の増進、医療経済の節減のため難聴対策の重要性を唱えている。日本では厚生労働省が主導する新オレンジプランにおいて認知症対策として難聴への対策強化が推進されており、国策としての補聴器普及策が進行している。しかし、補聴器を難聴者に勧める立場にある医療者自身が、機械による補聴がどのようなものであるか分かっていない状態では、難聴者に補聴器装用でどのような聞こえが期待できるか説明することができない。また、補聴器を勧められる立場にある難聴者にとって、補聴器は10万円程度から時には40万円もする高価なものであり、月に複数回の調整を必要とするがゆえ、機械により増幅された音を聞くということがどのようなものかまったく分からない状況では、補聴器を無料で試してみることにすらためらいを感じる。本活動では、当院の職員や外来診療において市販の集音器（約1.5～3万円/1台）を使用し、よりお手軽、気軽に機械を使って補聴することがどのようなものか体験し、補聴器を試しやすい環境をつくることを目的とした。

実施内容

【対象】
健聴者3名（30～40歳代）、難聴者9名（30～70歳代）を被検者とした。

【使用した機器】
拡声器、集音器による音の増幅程度は症例によって変化させることはせず、健聴者が使用したときに明らかに音が大きく聞こえると感じる程度で固定した。補聴のために使用した機器は以下の3種類である。①小型拡声器（以下、拡声器）：マイク（好きな場所に設置することが可能）（図1a矢頭）で拾った音を増幅してスピーカー（図1a矢印）から出力する。②気導集音器：首にかけたマイク（図1b矢頭）で拾った音を増幅してイヤホン（図1b矢印）から出力する。③骨導集音器：マイク（好きな場所に設置することが可能）（図1c矢頭）で拾った音を増幅して骨導振動子（図1c矢印）から出力する。外耳孔を塞ぐことなく、耳介前方にある頬骨弓付着部を振動させることで内耳に音を伝える。

【評価方法】
各被験者の希望、耳の状態を医師が勘案し、いずれかの機器を被検者に使用してもらい、使用感を自由に答えてもらった。

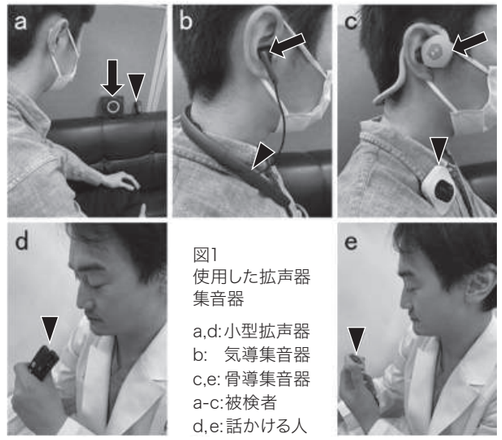


図1
使用した拡声器
集音器
a,d：小型拡声器
b：　気導集音器
c,e：骨導集音器
a-c：被検者
d,e：話かける人

活動結果

各被検者の機器使用感を表1にまとめた。健聴者（症例1-3）にとっては、補聴器を初めて装用した高齢者が経験するような雑音の不快さや、言語の聞き取りにくさを体験することが可能であった。高齢者に補聴器を勧める際のアドバイスや、補聴器装用者と接する際の注意点について身をもって理解することができた。難聴者（症例4-9, 11, 12）にとっては、集音器による補聴が、自分の聴こえにどのような変化をもたらすか体験することが可能であった。手術治療を選択するか否か、補聴器装用を試すか否かの決定に大きな影響を与える効果があった。すでに補聴器を装用している被検者（症例10）の意見は、今後医療者として難聴者に補聴器を勧める際に、集音器との違いを伝える上で貴重なものとなった。

【地域医療への寄与】
機械により増幅された音を聞くことがどのようなものか、試すための予約スケジュールをたてる必要もなく、煩雑な機器の調整をする必要もなく、容易に医療従事者、難聴者に体験させることができた。さらに、難聴者が自らの意思で治療法を選択する際の参考情報にもなり、実臨床でも効果の高い地域活動となった。

表1. 機器の使用感

症例番号	年齢（歳代）	聴力像	拡声器	気導集音器	骨導集音器
1	30	健聴	不自然な音に聞こえる。	雑音の不快さが際立つ。会話の補聴効果は乏しい。音楽が思った通りには聞こえない。気導集音器に加え拡声器を使うと言葉が聞き取りやすい。	気導集音器より言葉が聞き取りやすい。
2	40	健聴	拡声器で70 dBの会話を聞くより、生の55 dBの会話の方が聞き取りやすい。	骨導集音器より対面での会話は聞き取りやすい。雑音が気になる。	外耳道が開放されていて通常の音も耳に入ってくるのが良い。家事をしつつテレビを聞くのに良さそう。
3	40	健聴	不自然な音に聞こえる。	集音器に加え、拡声器で会話音を大きくすると、会話が聞き取りやすくなる。 雑音が非常によく聞こえる。言葉は雑音ほどよく聞こえるようにならない。	骨導集音器の方が会話がすっきり聞こえる。
4	20	片側混合			音質に違和感なくすごくよく聞こえる。耳を塞がずに済むのでよい。
5	20	両側感音	音が響く。	非常によく音が聞こえる。集音器を使用した方が拡声器の音も響きが少なくて聞き取りやすい。補聴をすればこんなによく聞こえるなら補聴器を試したい。	
6	30	両側伝音			非常によく聞こえる。
7	40	片側伝音		音がうるさいと感じたが、それはすぐに馴れそう。片耳だけ補聴された音だと左右の音にアンバランスを感じる。それゆえ補聴器より手術で難聴を改善させたい。	
8	50	片側混合			音はよく聞こえるが、子供の頃からの難聴なので馴れている。補聴に必要を感じない。
9	50	両側感音	よく聞こえる。	よく聞こえる。こんなによく聞こえる方法があると分かって嬉しい。すぐ補聴器をためしたい。	非常によく聞こえる。
10	50	両側感音	いずれの方法も音がこもる。補聴器の方が音がクリアーで聞き取りやすい。		
11	60	両側混合	音は大きく聞こえるが会話が聞き取りやすいわけではない。		非常によく聞こえる。拡声器の音も聞き取りやすくなる。しかし、まだ補聴器が欲しいとは思わない。
12	70	片側混合	聞き取りやすい。	とても聞き取りやすい。音が大きすぎるくらい。雑音に不快は感じない。拡声器を通した音を気導集音器で聞くと大きすぎる。	音が割れる。気導集音器の方が聞き取りやすい。日常で困っていないので補聴器が欲しいとは思わない。

地域における
社会貢献活動⑫

三鷹市の観光振興に向けた「三鷹健康まち歩きマップ」の作成

■実施日：2021年5月1日～2022年3月31日
■担当者：古本　泰之　外国語学部
観光交流文化学科 教授

目的

観光分野においては、コロナ禍の現在、新たな楽しみの一つとして自地域で観光を楽しむこと（いわゆるマイクロ・ツーリズム）、その中でも特に街歩きに注目が集まっている。

2020年度に申請者のゼミナール学生が街歩きに関するマップを収集したところ、三鷹市内においても既に何件か作成されていることが明らかになったが、三鷹をよく知る周辺住民に手に取ってもらうには、単なるスポット紹介を超えたさらなる工夫がいると感じられた。利用者の裾野を拡げるためには、他地域の街歩きマップと比較した際に特徴的となる「違い」を作って、注目を集める必要がある。そこで、三鷹市やその周辺自治体で三鷹市になじみのある高齢者をターゲットとし、三鷹の魅力を再発見しつつ健康増進を図ってもらうマップの原案を、申請者のゼミナールの学生が「みたか都市観光協会」や本学保健学部理学療法学科・石井博之ゼミナールなどのご協力の下に2020年度に作成した。

これらの経過を踏まえ本活動は、原案をブラッシュアップした上で印刷物として発行し、市内において頒布することを目的とした。

実施内容

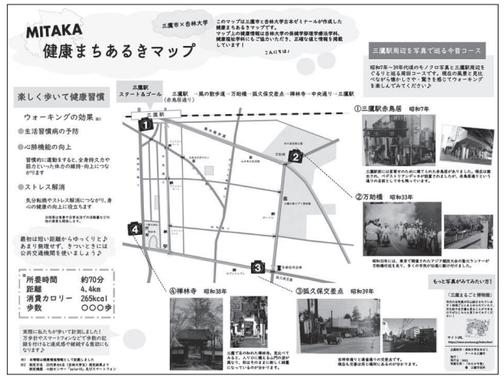
マップの原案は2020年度で作成を完了しているため、申請者と申請者が担当するゼミナール学生有志により、紙媒体での完成を目指した。

① 様式：A3×1枚表裏（カラー印刷）合計3,400部
（うち1,300部分を本助成費で充足）
② 内容：「三鷹市の今昔比較（主に三鷹駅前周辺）」
「農家直販所巡り」
（コースの詳細に加え、運動に関する基礎情報を掲載）
③ 連携先：みたか都市観光協会、三鷹市新川地域周辺農家
④ 活動内容
5～7月：市内各所への調整・校了
7月：印刷開始
9月～：市内各所に配布・配架、広報開始
その後も各所からの要請に基づき追加印刷（別経費）

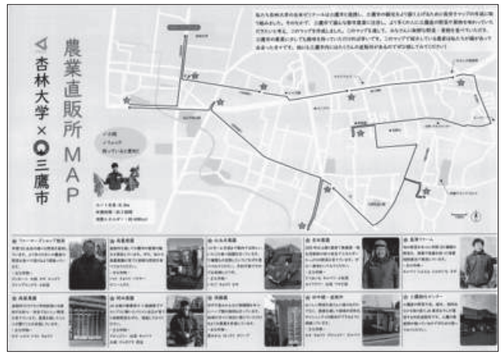
活動結果

運動習慣に配慮した情報を掲載した点、農業直販所を舞台とした点など、ユニークな視点が評価を受けて当初想定していた部数を越える発行・配布へとつながった。また、農家直販所めぐりについては農家のみならず対象とした地域全体からの評価が高く、三鷹市内の小中学校3校において保護者に配布されるカレンダーに同封されることになり、本学の研究・教育リソースの地域への還元につながった。（別経費）

新たなテーマや、別の農業直販所を追加したマップの作成について地域から期待が寄せられており、今後検討していく予定である。



三鷹市の今昔比較



農家直販所巡り

「第10回杏林CCRCフォーラム」を開催

こどもから大人まで「がん教育」のこれから ～がんになっても安心して暮らせる地域を目指して～

■日時：2022年3月12日（土）
■形式：ZOOMによるオンライン開催
■主催：杏林大学地域総合研究所
■共催：杏林大学地域交流推進室

3月12日(土)オンラインにて『こどもから大人まで「がん教育」のこれから』をテーマに杏林CCRCフォーラムを開催した。

講演に先立ち、開会の挨拶を行った本学副理事長の松田剛明先生は、「かつては『がんは治らない』と言われていたが、医学の進歩により完治が可能になった。これからのがん対策には、治療法の改善と普及だけにとどまらず、家族や学校・職場、地域社会といったがん患者を支える側の理解と支援体制づくりが課題となる。杏林には、がん治療、がん研究の豊富な実績があるので、それらを組み込むことで質の高いがん教育が提供できると考えている。」と述べられ、がん教育の重要性を示した。

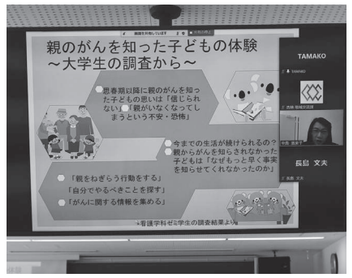
はじめに、杏林大学地域総合研究所所長・医学部腫瘍内科学の長島文夫先生が「小中高生向け『がん教育』の概要と出張授業の実際」と題して講演を行った。長島先生は「がんがどんなものかを教えるだけでは『がん教育』にはならない。子供が健康と命の大切さについて学び、様々な病気の予防や望ましい生活習慣を確立出来るようになることが本来の目的である。」と話され、また、それらの実現には、現場教員による事前事後指導が大きな役割を果たすとも述べた。講演内容だけでなく、講演終了後の児童・生徒への配慮を欠かさないことも重要だと述べた。

続いて、「がん患者を親に持つ子どものサポート」として、保健学部看護学科看護養護教育学専攻の中島恵美子先生が講演した。家族ががんになったとき、子供のことを思って真実を隠し通そうとするのではなく、「子供を家族の一員としてできるだけ正直に状況を伝え、子供なりの役割を果たせるように関わらせることも大切だ。」と述べた。また、子供の年齢に応じて病気の伝え方を選択することも不可欠であり、「学校や地域が成長段階にあわせたがん教育を行えるように支援していきたい。」とお話した。

最後に、杏林大学医学部付属病院庶務課の橋詰崇課次長が「治療費を支援する制度」として講演した。「がんにかかる治療費は高額になるが、制度をうまく活用することで窓口での支払いを一定におさえることが出来る。費用が高額であってもためらうことなく治療が受けられるよう、様々な支援体制が整えられている」とお話した。

今、がん教育を巡って学校現場では様々な課題があげられている。付属病院の診療実績と大学の持つ知識・研究技術を地域の教育にも還元出来るよう、今後も「がん教育」に取り組んでいく。

左から松田副理事長、司会の古本室長



講師陣（左から橋詰課次長、中島先生、長島先生）

その他の地域交流活動

種別	No.	行 事 / 活 動 名	実施期間	活動主体
教育	1	日野市保育カウンセリング	4月～2022年3月　月1回	保健学部
	2	第1回　TAMA Diabetes & Kidney Conference	5月10日(月)	医学部
	3	三鷹市医師会学術講演会 高尿酸血症の病態と管理 - 腎臓・リウマチ科からみた高尿酸血症	5月13日(木)	医学部
	4	調布市医師会学術講演会	5月25日(火)	医学部
	5	八王子市男女共同参画推進条例制定検討会	5月28日(金)・7月15日(木)・11月12日(金) 12月13日(月)・2022年2月16日(水)	外国語学部
	6	小平市医師会学術講演会 高尿酸血症の病態と管理- 腎臓・リウマチ科からみた高尿酸血症	6月17日(木)	医学部
	7	がん等の診療に携わる医師等に対する緩和ケア研修会	7月4日(日)	医学部付属病院
	8	多摩泌尿器科医会(第152回・153回・154回)	7月16日(金)・11月26日(金)・2022年2月4日(金)	医学部
	9	小平福祉園　産業医研修会　生活習慣病	8月20日(金)	医学部
	10	第22回　皮膚合同カンファレンス	10月2日(土)	医学部
	11	第66回　日本音声言語医学会総会・学術講演会	10月7日(木)～10月8日(金)	医学部
	12	第66回　日本音声言語医学会ポストコングレスセミナー	10月9日(土)	医学部
	13	多摩関節エコーワークショップ(肘関節)	10月10日(日)	医学部
	14	西東京市医師会学術講演会 高尿酸血症の病態と管理 - 腎臓・リウマチ科からみた高尿酸血症	11月24日(水)	医学部
	15	第17回　西東京糖尿病療養指導プログラム　西東京薬剤師研修会 糖尿病合併症- 学ぶポイント　教育講演	11月24日(水)	医学部
	16	三鷹市内科医会学術講演会 ～高血圧症を心臓と腎臓の立場から考える～	11月26日(金)	医学部
	17	三鷹市市民食育講座 「子どもの食物アレルギー　離乳食を始める前の基礎知識」	12月13日(月)	医学部
	18	三鷹市医師会内科医会学術講演会	12月14日(火)	医学部
	19	第33回　杏林大学耳鼻咽喉科病診連携カンファレンス・講習会	12月15日(水)	医学部
	20	多摩関節エコーワークショップ(足関節)	12月18日(土)	医学部
	21	令和3年度　東京都立多摩総合精神保健福祉センター 精神保健福祉研修(後期) 「アウトリーチ支援研修(後期)」:『家族』を理解し、支援につなげる	12月10日(金)	保健学部
	22	第2回　杏林大学ENT病診連携講習会	2022年3月23日(水)	医学部
教育 地域活性	23	緩和ケアチーム研修会 (オンライン開催) 「緩和ケアチームの専門職に訊く　癒しの技:食べる、語る、眠る」	2022年1月20日(木)	医学部付属病院
健康	24	ペアレントトレーニング	5月18日(火)～12月2日(木) (不定期前期6回、後期6回)	保健学部
	25	ケーブルテレビJ:COM武蔵野・三鷹　動画で市民講座 学びの杜	6月(9月以降大学ホームページで継続視聴可)	医学部
	26	調布市医師会講演会	9月8日(水)	医学部
	27	NHKラジオ「マイあさ！健康ライフ」脳卒中を予防しよう	9月13日(月)～9月17日(金) (再放送 11月15日(月)～11月19日(金))	医学部
	28	高齢者対象　「いきいきシニアライフ」講座	10月21日(木)・10月28日(木)	医学部
	29	NHK教育テレビ きょうの健康「脳卒中 治療と予防の最新トレンド」	2022年1月31日(月)～2月3日(木) (再放送 2月7日(月)～2月10日(木))	医学部
健康・教育	30	がん看護研修(オンライン開催)	10月2日(土)・11月12日(金)・12月17日(金)	医学部付属病院
	31	北多摩特発性正常圧水頭症を考える会	11月19日(金)	医学部
	32	がんと共にすこやかに生きる講演会(オンライン開催)	2022年3月5日(土)	医学部付属病院
健康・教育 地域活性	33	北多摩南部医療圏糖尿病医療連携推進事業(ブルーライトアップの開催他)	4月1日(木)～2022年3月31日(木)	医学部付属病院
	34	ステロイド使用による骨粗鬆症を考える会にて講演	6月29日(火)	医学部
	35	日本AS(強直性脊椎炎)友の会オンライン総会にて講演	9月18日(土)	医学部
	36	杏林大学医学部付属病院炎症性腸疾患包括医療センター　オンライン講演会	10月29日(金)	医学部
その他	37	多胎育児準備クラス	第1回:6月12日(土)・19日(土) 第2回:10月2日(土)・9日(土) 第3回:2022年1月22日(土)・29日(土)	保健学部
	38	ピアサポーター養成と多胎児家庭訪問	10月12日(火)・12月13日(月) 5月～2022年3月(オンライン家庭訪問)	保健学部
地域活性	39	多摩NST研究会	5月18日(火)	医学部
	40	Next Web Symposium	5月28日(金)	医学部
	41	多摩地区消化器外科手術セミナー	9月28日(火)・10月2日(土)	医学部
	42	第5回　杏林大学医学部付属病院医療連携フォーラム(オンライン開催)	11月18日(木)	医学部付属病院

「杏林CCRC研究所」から「地域総合研究所」に名称を変更

本学では、2013年度に文部科学省大学教育改革事業「地(知)の拠点整備事業(COC)」(のちに「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」と事業名変更)に採択されたのを機に、本学の教育・研究資源を動員して包括的な地域連携の推進拠点となることを目的に杏林CCRC研究所を設置した。CCRCとは元来Continuing Care Retirement Communityの略であるが、本学独自の「Center for Comprehensive Regional Collaboration:杏林CCRC」として集約的に研究を行い、地域志向教育研究と研究所の主導する研究に取り組んできた。

これまでの活動実績が認められてきた一方で、学内外に対してCCRCの略語の意図が伝わりにくく、研究所の趣旨と活動の理解に時間がかかるという弊害が生じてきたため、2021年7月1日に「地域総合研究所」へ名称変更した。

『都市型高齢社会の健康と安心』を主題に、学生と地域関係者が共に学ぶ「生きがい創出」、退職団塊世代の「健康寿命延伸」、大規模自然災害に備える「災害に備えるまちづくり」に、本学の教育・研究機能が集中する三鷹市を中心に取り組みを進め、八王子市、羽村市、武蔵野市にもその成果を反映していく。

「子育てラボワークショップ」を開催

2022年3月18日(金)、18時から三鷹市役所第2庁舎において「子育てラボワークショップ」を開催した。これは、新型コロナウイルス感染症の拡大による影響を受けて学校に通えない状況になった子供達の学びの不安や子育て世代の生きづらさなど、地域住民が抱える問題を本学が三鷹市と共に考える機会を持ってみようという趣旨からその第一歩を踏み出すことになった。

本学保健学部の加藤雅江教授が講演とファシリテーターを務め、市内の子育て世代や外国人、子ども達のサポートを行う活動団体、行政関係者が一同に集い、4つのグループに分かれて活動内容の紹介や情報交換を行った。参加した方々からは、「お互いにそれぞれの存在を認知しているものの具体的な活動や業務内容を知らなかった。この機会に知ることができて有意義だった。」「行政と地域がつながっていないことを実感した」などの感想があった。ここからがスタートとして、今後もこうした活動を続けていきたいと考えている。

講演する加藤雅江教授

活動団体、行政、大学関係者で行われたグループワーク

地域との連携活動

自治体との連携

本学は東京都羽村市・三鷹市・武蔵野市において、相互の資源および研究成果等の促進することによる活力ある地域社会の創造や人材育成などを目的として2010年6月に羽村市と、2013年9月に三鷹市と、2020年1月に武蔵野市と包括的な連携に関する協定を締結した。また、八王子地域は25の大学・短大・高専がある学園都市であり、本学は2009年4月から大学コンソーシアム八王子に加盟し、生涯学習の推進や情報発信、学生と市民の交流、外国人留学生の支援などの事業に取り組んでいる。

2021年度には新たに静岡県東伊豆町（2021年12月）、秋田県湯沢市（2022年1月）、宮城県東松島市・石巻市（2022年3月）の4市と包括連携協定を締結した。継続するコロナ禍でありながらも工夫をしながら地域活動の開催や連携事業を実施することができた。

三鷹市

外国語学部・保健学部の教員と学生が、情報・健康・文化やマイクロツーリズムに関するテーマで三鷹市、みたか都市観光協会の協力を得て、健康まちあるきマップ活動を継続的に展開した。完成したマップは市内各所に配架し、好評であった。また、教育委員会を通じた学校教育ボランティア・みたか地域未来塾への学習支援員の派遣事業を継続実施した。

●第三中学校2年生の職場体験

将来の社会生活について考える機会をもつための進路・キャリア学習の一環として実施されている中学校2年生の「職場体験」を受け入れている。2021年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、「職場体験」に代わる進路学習としてオンラインによる「職場への取材」が行われた。薬剤師の仕事に興味のある生徒であったことから、医学部付属病院薬剤部の協力を得て実現した。取材は中学生からの質問に、薬剤部長が一つ一つ丁寧に答える形で行われた。

●「学生によるミタカ・ミライ研究アワード2021」に出場

12月18日（土）、三鷹産業プラザにおいて「学生によるミタカ・ミライ研究アワード2021」が開催され、総合政策学部尾崎愛美ゼミナールの学生が出場した。研究テーマは、「進化する顔認証ソリューション～省人化・非接触、ポストコロナのスタンダードとしての顔認証～」で、三鷹市の現状を調査するため、市職員の方にインタビューに協力してもらい研究発表を進めることができた。

●新川商工栄会エコバックのロゴ作成

観光交流文化学科の古本ゼミナールでは、三鷹市新川地域の商店会「新川商工栄会」と連携し、同会所属店舗が実施するセール（3月4日～10日）期間中、特典として配布されるエコバッグのデザイン（ロゴ）に取り組んだ。担当した3年ゼミ生は、2021年の秋から各店舗の視察やデザイン案の検討を何度も行い、ロゴを完成させ、期間中に対象店舗(同会所属)でお買い物をされた方・ご利用された方に対して、エコバックが配布された。

デザイン案を検討する学生

学生がデザインしたロゴ入りエコバッグ

三鷹市ボランティア参加一覧

No.	活 動 名 称	実施日	学部
1	こども食堂「だんだん・ばぁ」（居場所づくりプロジェクト：地域の子どもたちへ食事提供）	6月23日～12月8日	保健学部・総合政策学部・外国語学部
2	学習支援ボランティア（NPO法人 文化学習協同ネットワーク）	7月9日～12月21日	保健学部
3	三鷹市学生教育ボランティア（第六小・羽沢小・第三小・第七小・南浦小）	8月26日～3月23日	保健学部・外国語学部
4	みたか地域未来塾（第六小・第三中・第一小・羽沢小・中原小・高山小・北野小）	8月26日～3月23日	保健学部・総合政策学部・外国語学部
5	3市（武蔵野市・三鷹市・小金井市）連携事業（となりまちプロジェクト）	10月6日	外国語学部
6	わいわい広場（第三小）	10月7日～28日	保健学部
7	三鷹健康ストレッチ教室	12月4日	保健学部
8	年末年始の花の装飾（アトレヴィ三鷹）	12月28日	保健学部・外国語学部

羽村市

羽村市スポーツセンターで健康寿命延伸をはかるための支援活動「生涯スポーツの機会提供プログラム」が継続実施されたほか、協定に基づく連携事業の各種講座の講師派遣や学生講座企画など教育的な地域貢献活動を展開した。

●「大切な人権…新型コロナウイルス禍での女性と子どもの今」

新型コロナウイルス感染症が蔓延し、世の中が混乱し社会の有様が大きく変化した今、人権の面では無視や差別、家庭内でのDVの増加など、女性と子どもに焦点をあてた講演会が9月5日（日）に開催された。法律の専門家である総合政策学部の北田真理准教授が講師を務め、民法の制度から解決策を探る講演を行った。

●羽村市職員対象「ゲートキーパー養成研修」

羽村市が策定した自殺対策計画を推進する一環として職員向けの研修会が10月21日（木）と11月9日（火）に開催された。保健学部健康福祉学科の加藤雅江教授が講師を務め、面接・相談技術のポイントや適切な機関へのつなぎ方など、市職員の対応力強化に向けた内容で実施した。

●学生連携企画講座

「脳トレ体験！～予防しよう！自身の認知症～」

12月11日（土）、羽村市生涯学習センター「ゆとろぎ」にて開催した。この講座は外国語学部観光交流文化学科古本泰之ゼミナール3年生と「ゆとろぎ」の連携により行った。株式会社カレア代表取締役の田口善彦氏と認知症予防脳トレ士の八巻裕美子氏に講演をしていただいた。企画・運営する学生達は、高齢社会に着目し、認知症を予防するうえで脳のトレーニング、アンチエイジングを楽しくゲーム感覚で体験する機会の提供を考え進めたもので企画を実行することの貴重な体験となった。

羽村市ボランティア参加一覧

No.	活 動 名 称	実施日	学部
1	20th アート in はむら展	6月30日・7月2日・7月9日	外国語学部
2	羽村市・杏林大学共催　運動健康増進プログラム	8月21日・12月18日	保健学部

武蔵野市

2020年1月に包括連携協定を締結した武蔵野市での地域活動は、特に介護や看護、健康事業で行われてきた。市主催の「ケアリンピック武蔵野」は、YouTubeを利用したライブ配信で開催され、教員、学生が参加した。また、学校教育の分野では家庭と子どもの支援員として、保健学部・総合政策学部・外国語学部の学生がボランティア活動を行った。

●「ケアリンピック武蔵野」で動画発表

11月27日（土）、YouTube配信によるオンライン開催に参加した。今回は、保健学部教員が演題発表の審査員として参加した他、総合政策学部の学生達が武蔵野市内の介護サービス事業所等を訪問し、介護サービス従事者にインタビューを行い、その仕事の魅力を伝える動画を作成し発表を行った。

●「大人のための生涯学習ガイド」で社会人講座を周知

武蔵野市で発行する「大人のための生涯学習ガイド」に、本学の履修証明プログラム「高齢社会における地域活性化コーディネーター養成プログラム」に関する情報を掲載してもらい、講座に関する情報提供を行った。

武蔵野市ボランティア参加一覧

No.	活 動 名 称	実施日	学部
1	武蔵野市内公立学校ボランティア（家庭と子どもの支援/不登校支援/別室登校児支援）	9月3日～2022年3月24日	保健学部・総合政策学部・外国語学部

八王子市

総合政策学部生が12月に開催された学生発表会に参加するなど、大学コンソーシアム八王子の事業に参画した。また、市や大学コンソーシアム八王子からの情報提供を学生や教職員に対し学内周知した他、調査回答等に協力した。八王子市ではリカレント教育支援アプリ（通称「はちリカ」）を新たに立ち上げたため、本学の履修証明プログラム「高齢社会における地域活性化コーディネーター養成プログラム」に関する情報をアプリ内に掲載してもらい、講座に関する情報提供を行った。

八王子市ボランティア参加一覧

No.	活 動 名 称	実施日	学部
1	高尾の森自然学校	4月25日	保健学部

秋田県湯沢市

1月27日(木)にオンラインにて秋田県湯沢市との包括連携協定調印式を実施した。杏林大学はこれまでに4つの自治体と包括連携協定を結んでいるが、オンラインでの調印式実施は初の試みとなった。

井の頭キャンパスと湯沢市庁舎を同時中継で結んだ調印式には、大瀧純一 学長のほか、古本泰之地域交流推進室室長、石井博之 同室副室長が出席し、湯沢市からは佐藤一夫市長が出席した。大瀧学長は今回の協定締結に対し湯沢市に謝辞を述べるとともに、「本学の強みである医療・福祉の分野の研究資源や人材資源を活かして、湯沢市の地方創生に貢献していきたい。」と挨拶した。佐藤市長からは「杏林大学とは、かだる雪まつりや秋の宮温泉郷での観光関連事業を通して長年にわたって交流を重ねて来た。今後は、観光の分野に加えて様々な分野でも交流を深め、湯沢市の持続的発展のために協働していきたい。」と述べた。

今回の包括連携協定の締結を機に湯沢市との結束を強化し、地方の発展を支える「知の拠点」となるべく進んでいく。

左から佐藤市長、大瀧学長

静岡県東伊豆町

12月16日(木)に静岡県東伊豆町と包括連携協定を締結した。杏林大学が東京都外の自治体と包括連携協定を結んだのは今回が初めて。

締結式は井の頭キャンパスにて行われ、本学からは大瀧純一 学長、古本泰之地域交流推進室室長、石井博之 同室副室長、小堀貴亮 外国語学部教授、東伊豆町からは太田長八 町長、森田七徳 企画調整課課長、山田義則 観光産業課課長、鈴木宏規 観光産業課主任主事が出席した。式では、大瀧学長が謝辞を述べるとともに、「杏林大学ではこれまで、「生きがい創出」、「健康寿命延伸」「災害に備えるまちづくり」、を3本柱に、主に首都圏において多くの研究・社会貢献活動を展開してきた。東伊豆町は温泉地をはじめとした豊かな観光資源に恵まれているので、外国語学部観光交流文化学科を中心に多様な連携活動を展開していきたい。」と挨拶した。

太田町長は「今回、このように協定を締結することが出来て大変光栄である。杏林大学と連携することで少しでも多くの若い世代に東伊豆のことを知ってもらい、地域活性化につなげることが出来ればと考えている。」とお話した。

今後は、ウェルネスツーリズムの構築やインターンシップの実施などを中心に、様々な分野において学生教育と地域貢献活動を連動させていく。

東伊豆町関係者とともに

左から太田町長、大瀧学長

宮城県東松島市・石巻市

3月29日（火）に研究資源や人材の交流、地域振興等を目的に、宮城県東松島市と宮城県石巻市の2市とそれぞれに包括連携協定を結んだ。調印式はどちらもオンラインにて行われ、大瀧純一学長、古本泰之 地域交流推進室長のほか、総合政策学部から、北島勉 学部長、木暮健太郎 教授、三浦秀之 准教授が出席した。

10時から宮城県東松島市との包括連携協定の調印式を行い、渥美巌市長より「学生の学習の場としての受入だけに留まらず、様々な分野で交流を深めたい。」との挨拶があった。

また、13時からは、宮城県石巻市との包括連携協定の調印式を行った。齋藤正美市長は「今回の協定締結を機に、地域活性化や新たな交流人口の創出につなげていきたい。」と述べた。

今回の2市との締結について、大瀧学長は「東松島市、石巻市と協定を結べたことは、教育・研究の推進にとって大きな一歩となった。今後、学生たちは、東北の産業、文化等に直に触れながら、様々なことを学び吸収することと思う。本学の強みである医療、保健、福祉の研究資源・人材資源を活用し、地方創生、復興支援に尽力していきたい。」と述べ、「地(知)の拠点」としての実績の強化に意欲を示した。

東松島市　渥美巌市長

石巻市　齋藤正美市長

大瀧純一学長

地域との連携活動

株式会社 アトレとの連携 ～花と迎える年末年始

■実施日：2021年12月1日～2022年1月4日
■担当者：楠田　美奈　保健学部 看護学科 学内講師
　　木村　尚未
　　華道家元池坊中央委員 副総華督
　　東京都立六本木高等学校 非常勤講師

目的

杏林大学とアトレヴィ三鷹との連携事業として、今年で6年目を迎えた年末年始の作品展示である。本活動は社会貢献として2つの目的がある。

学生は大学の代表として対外的な活動を行うことになる。普段は接する機会がない人へ、作品内容を説明することや展示に向けた要望を『どうしたら伝えられるか』を考える場となっている。これはコミュニケーションスキルを磨くきっかけにもなる。また、展示期間中には、地域の方から声をかけられる機会もあり、自分たちの活動が、地域の方との繋がりにも寄与していることを知る機会となる活動となっていることも目的の一つと言える。

そして、学業以外での学生時代の成功体験を積むことが、その後の学生生活へのモチベーションにも繋がっていることも目的の一つである。学生にとっては「さまざまな人に作品を見ていただけるからこそ、頑張ろう」「大きい作品を展示するのは、なかなかできないことだから、みんなで協力して完成させたい」という気持ちが既に育まれている活動である。

実施内容

【活動の日程・参加者など】
実施日：2021年12月24日～2022年1月4日実施
場　所：杏林大学井の頭キャンパス、
　　JR三鷹駅内アトレヴィ三鷹
本学参加者：9名〔保健学部：8名（4年4名、3年2名、2年2名）、外国語学部：1名（3年）〕

【活動の実施内容】
12月上旬から、Zoomを使用してアトレヴィ三鷹の担当者の方との打ち合わせや作品のプレゼンテーションを実施した。『赤を基調とした、華やかで、目立つ感じにしてほしい』という先方様からの要望と、学生からは『竹の伸びやかな雰囲気を生かした高さのある作品にしたい』という希望も提示をし、承諾を得て作品の構想を練っていった。学生から希望があった青竹の採取を12月24日に八王子キャンパス

で行い、井の頭キャンパスへ運搬した。竹採取については、松田理事長先生をはじめ、造園業者の方のご理解ご協力のもと実施させていただいた。27日はその竹の加工（色保持のための油脂でのコーティング、及び作品サイズに合わせた切断）を実施し、28日は作品作成とアトレヴィ三鷹へ搬入と展示を行なった。搬入では、作品を8割ほど出来上がった状態にし、駅構内での作業を短時間で終了するように事前の準備を入念に行った。搬入し、最終的な作品の確認には、本活動の分担者でもある木村も指導に加わり、学生は指示を受けながら動くことができた。

12月29日以降の1日1回のメンテナンス（枯れている花の入れ替えや、器の水の有無の確認）を本活動責任者と分担者、学生とで協力して実施した。メンテナンス中には駅利用のお客様から「これ本物？」「毎日お世話しているの？」「瑞々しい作品で良いですね」と声をかけられることもあった。

12月31日には、分担者の木村とともに、花の入れ替えを実施し、新年の展示にふさわしくおめでたい場には欠かせない『松・竹・梅』をすべて入れた。また学生から「ぜひ入れたい」とリクエストがあった『南天』も加えて生けた。コロナ禍でも『災難や難関を転じる』という意味のある花材であり、このような環境でも学生自身の思いをこめた作品に仕上げることができた。1月4日午後には、アトレヴィ三鷹から作品を撤去し、その後は井の頭キャンパス内の図書館へ移設し、1週間展示をした。

活動結果

学生は、展示作品の説明等をアトレヴィ三鷹担当者に行うことによって、自分たちの考えをどのしたら伝わるのかを考える機会を得られた。そのために、あらかじめ教員や分担者であり華道のスペシャリストでもある木村へも相談し、プレゼンテーションで使用するデッサンの修正を数回実施した。プレゼンテーションの前には、準備を行うことも『相手に自分の考えを伝えるために必要なこと』と理解が深められた。

また学生の社会性やマナー意識を養う機会も得られた。前述のプレゼンテーションもさることながら、花材を届けてくださる花屋さんへの対応を通して花の保存方法や生けるときの留意点などを聞くことで、社会性を育むことができたと考える。分担者である木村への挨拶もきちんと実施し、マナー意識も育てることに寄与したと言える。

日々のメンテナンスには、駅を利用されているお客様から声かけられることもあり、花材名を説明したり、華道歴を話したりなど、コミュニケーションをとることもでき、社会性を養うことができた。

今回の展示は「高さを生かした作品」にしたいという学生からの希望があった。展示の際には安全面への配慮が必要であることが想定できた。そのため、竹を切るときには、できるだけまっすぐ切るように集中することや、展示の際には、竹の下には耐震ゲルマットを置くこと、作品の竹の節に小石を入れて重心が下にくるよう安定性を図るなど、様々な工夫を学生自ら考え実施していた。その結果、安全に展示することができた。予測できる問題点の対処方法を自分たちで考えることができたことも、本活動での教育的効果があったと言えると考えられる。

教員の指導を受けながら作品制作中

華やかな雰囲気とお正月らしさを出した作品が完成

2021年度　杏林大学公開講演会・公開講座

本学では2021年度において大学が持つ知的資源をより広く地域住民に還元するため、地（知）の拠点整備事業のテーマである「生きがい創出」「健康寿命延伸」「災害に備えるまちづくり」を継承したテーマの他、知識や教養に結びつく公開講演会を実施した。

今年度は前年から続く新型コロナウイルス感染症の影響を鑑み、状況に応じてZOOMによるオンライン講演会と対面による講演会を計12回開催した。感染防止対策を講じたうえで多くの方に聴講いただき、おおむね好評であった。

杏林大学公開講演会一覧

No.	開催日	時　間	講　座　名	講　師	開催場所
1	5月12日（水）	15:30〜17:30	地域の人と文化をつなぐ 太鼓プロ集団の試み	有限会社 志多ら 代表取締役　大脇聡	井の頭キャンパス
2	6月9日（水）	15:30〜17:30	蘇る 関東で一番小さな村 〜魅力を創り出したのは？	NPO法人 小さな村総合研究所 代表理事　小村幸司	井の頭キャンパス
3	11月10日（水）	14:00〜14:45	コロナに負けない体をつくろう！ 〜呼吸法も含めたプログラムの実践〜	保健学部 准教授　一場友実	井の頭キャンパス （ZOOMオンライン開催）
4	11月18日（木）	15:00〜15:45	新聞、ニュースの英語を読む	外国語学部 准教授　北村一真	井の頭キャンパス （ZOOMオンライン開催）
5	11月20日（土）	11:00〜11:45	温暖化と北極圏の地政学	総合政策学部 教授　渡辺剛	井の頭キャンパス （ZOOMオンライン開催）
6	11月30日（火）	14:00〜16:00	気づこう、かかわろう　こどものSOS 〜ヤングケアラーの問題から考える〜	保健学部 教授　加藤　雅江	羽村市生涯学習センター ゆとろぎ
7	12月4日（土）	11:00〜11:45	犯罪防止かプライバシーか 〜AI時代の到来〜	総合政策学部 講師　尾崎　愛美	井の頭キャンパス （ZOOMオンライン開催）
8	12月11日（土）	11:00〜11:45	写真で見るイギリス・オックスフォード 〜大学町の歴史と現在 〜	外国語学部 教授　高木眞佐子	井の頭キャンパス （ZOOMオンライン開催）
9	12月17日（金）	15:00〜15:45	英語の小説を楽しもう ーオスカー・ワイルドを読むー	外国語学部 教授　倉林　秀男	井の頭キャンパス （ZOOMオンライン開催）
10	2022年 1月18日（火）	15:00〜15:45	我慢していませんか？ 女性の排尿トラブルと骨盤臓器脱	医学部 学内講師　金城　真実	井の頭キャンパス （ZOOMオンライン開催）
11	2022年 1月22日（土）	11:00〜11:45	バイデン政権のインド太平洋政策	総合政策学部 准教授　島村　直幸	井の頭キャンパス （ZOOMオンライン開催）
12	2022年 2月11日（金）	13:30〜15:30	キャッシュレス決済の現状と未来	総合政策学部 教授　大川　昌利	羽村市生涯学習センター ゆとろぎ

三鷹市市民聴講生講座【前期 4月〜7月】

※新型コロナウイルス感染症の影響の為、オンライン授業科目を含みます

No.	開　催　日		時　間	講　座　名	講　師	
1	4月6日〜7月20日	15回(各回火曜日)	10:40〜12:10	中東・アフリカの政治・経済	総合政策学部 教授 (現 客員教授)	知原　信良
2	4月7日〜7月21日	15回(各回水曜日)	13:00〜14:30	食品製造学	保健学部 准教授	大久　朋子
3	4月7日〜7月21日	15回(各回水曜日)	14:40〜16:10	日本文化論(中・観)	外国語学部 客員教授	金田一秀穂
4	4月8日〜7月22日	15回(各回木曜日)	9:00〜10:30	日本国憲法	総合政策学部 講師	尾崎　愛美
5	4月8日〜7月22日	15回(各回木曜日)	13:00〜14:30	国際経済学B(金融)	総合政策学部 教授	西　　孝
6	4月8日〜7月22日	15回(各回木曜日)	13:00〜14:30	英語文学Ⅱ	外国語学部 教授	高木眞佐子
7	4月8日〜7月22日	15回(各回木曜日)	14:40〜16:10	アジアの文学・文化(韓)	外国語学部 教授	鄭　　英淑
8	4月9日〜7月16日	15回(各回金曜日)	9:00〜10:30	生活と法(春)	総合政策学部 教授 (現 非常勤講師)	大山　徹
9	4月9日〜7月16日	15回(各回金曜日)	13:00〜14:30	刑法Ⅰ(総論)	総合政策学部 教授 (現 非常勤講師)	大山　徹
10	4月9日〜7月16日	15回(各回金曜日)	16:20〜17:50	英語学特論Ⅲ	外国語学部 准教授	八木橋宏勇

三鷹市市民聴講生講座【後期 9月〜1月】

No.	開　催　日		時　間	講　座　名	講　師	
1	9月17日〜2022年1月7日	15回(各回金曜日)	10:40〜12:10	刑法Ⅱ(各論)	総合政策学部 教授 (現 非常勤講師)	大山　徹
2	9月17日〜2022年1月7日	15回(各回金曜日)	13:00〜14:30	時事問題研究B	総合政策学部 准教授	島村　直幸
3	9月17日〜2022年1月7日	15回(各回金曜日)	14:40〜16:10	国際会計論	総合政策学部 教授	内藤　高雄
4	9月17日〜2022年1月7日	15回(各回金曜日)	16:20〜17:50	英語学演習Ⅲ	外国語学部 准教授	八木橋宏勇
5	9月20日〜2022年1月17日	15回(各回月曜日)	16:20〜17:50	高齢保健学	保健学部 准教授	岡本　博照
6	9月21日〜2022年1月18日	15回(各回火曜日)	9:00〜10:30	国際政治経済学	総合政策学部 准教授	三浦　秀之
7	9月21日〜2022年1月18日	15回(各回火曜日)	10:40〜12:10	経営学総論Ⅱ	総合政策学部 准教授	粕谷　崇
8	9月21日〜2022年1月18日	15回(各回火曜日)	13:00〜14:30	英語学演習Ⅰ	外国語学部 教授	稲垣　大輔
9	9月21日〜2022年1月18日	15回(各回火曜日)	13:00〜14:30	宿泊産業論	外国語学部 准教授	西山　桂子
10	9月22日〜2022年1月19日	15回(各回水曜日)	10:40〜12:10	生命倫理学	保健学部 准教授	角田 ますみ

八王子学園都市大学・いちょう塾【後期 9月〜2月】

No.	開　催　日		時　間	講　座　名	講　師	
1	9月16日〜2022年1月13日	15回(各回木曜日)	13:00〜14:30	ヨーロッパ政治論	総合政策学部 准教授	島村　直幸
2	9月17日〜2022年1月7日	15回(各回金曜日)	13:00〜14:30	時事問題研究B	総合政策学部 准教授	島村　直幸
3	9月21日〜2022年1月18日	15回(各回火曜日)	9:00〜10:30	家族法	総合政策学部 准教授	北田　真理
4	9月21日〜2022年1月18日	15回(各回火曜日)	13:00〜14:30	地域圏研究Ⅳ(日) 〜短歌の歴史と今〜	外国語学部 特任教授	河路　由佳
5	9月29日〜11月24日	5回(各回水曜日)	18:30〜20:00	すいみんのおはなし 〜すいみんの困りごととそれへの術〜	保健学部 教授	中島　亨
6	11月6日〜11月27日	3回(各回土曜日)	10:20〜11:50	貨幣観の転換と問題点 〜医療について考える〜	保健学部 学内講師	坂本　岳士
7	2022年2月5日〜2月26日	4回(各回土曜日)	18:00〜19:30	認知言語学への招待 〜通じる世界のことばとこころ〜	外国語学部 准教授	八木橋宏勇